

コミュニティでのフィールドワーク／デイリーワークの意味

——惑星社会の“臨場・臨床の智”への社会学的探求 (3) ——

新 原 道 信*

Significance of Fieldwork / Dailywork within the Living Community: Sociological Explorations on the “Living knowledge (cumscientia ex klinikós)” for the Planetary Society (3)

NIIHARA Michinobu

This article evolved from a research project called “Sociological Explorations on the “Living knowledge (cumscientia ex klinikós)” for the Planetary Society” which is a part of the European Research Network’s activities at the Institute of Social Sciences, Chuo University. The project is based on the idea that exploring, against the tide of the disposition to dissociate/disengage oneself from what is happening, “Co-creating the Communities and Co-becoming communally for the Sustainable Ways of Being” is urgent and crucial for the 21st century planetary society, in which the multiple problems concerning exclusion and inclusion are increasingly frequent. Throughout the project, we have sought to clarify the ways in which “Living knowledge (cumscientia ex klinikós)” is lived or embodied in the “frontier/liminal territories” in which the varieties of “homines patientes” try to coexist while conflicting, merging, and intertwining with one another. Under such objectives, I conducted “Fieldwork/Dailywork within the living Community” in certain areas, regarding the autonomy and independence of such localities, the global inter-cooperation among the communities, and the composite/complex/hybrid identities of the “homines patientes”, while employing such key concepts as “imagination and creativity of limit-situation.” The article reflects on the epistemology developed from dialogue with Alberto Melucci, Alberto Merler, Andrea Vargiu, Anna Fabbrini-Melucci. My research experience of encountering the “wise on the frontier/liminal territories” and being involved in the “crude reality” submits a theoretical framework for conceiving and coping with the ongoing problems. In that, the article sets out a preliminary exploration for what might be called “Exploring the Planetary Society/Inner Planet” which is being involved with the field, being there by accident at the nascent moments in which critical

* 中央大学文学部教授

events take place.

キーワード：臨場・臨床の智，惑星社会のフィールドワーク，コミュニティでのフィールドワーク／デイリーワーク，メルッチ，メルレル，立川・砂川，子どもたち，共創・共成

【目次】

1. はじめに——惑星社会のもとでの“コミュニティでのフィールドワーク／デイリーワーク”にはいかなる意味があるのか
2. 「未来教育シンポジウム」の“舞台裏 (retroscena)”
3. “社会の子どもたち”が巢立つ“共創・共成”コミュニティにむけた〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉の試み
4. 聴衆からの反応
5. 学生の葛藤と後からやって来る理解
6. 〈合わせ鏡〉の“コミュニティ共創・共成プロジェクト”
7. むすびにかえて——“コミュニティでのフィールドワーク／デイリーワーク”の存在意義

笑うことと泣くことの間関係性は、私たち誰もが備えもつ子どもらしさの要素である、無償性／無条件性 (gratuitousness) と遊びの空間への接近をもたらしてくれるのである。……不思議なものに驚くことの間を創り出すということは、可能なものと見知らぬものとの目撃しそれを証言しようとする人々との間に創られる、無心の関係性を再構築する必要があることを意味している。私たちは、子どもたちへ、人間とは異なる種へ、そして伝統的文化へと目を向けることから始めることができるのである。それらは、何もかも全てが暴かれたわけではないこと、全てが語られたわけではないこと、そしてきっと、全てが語られる必要はないということ、私たちに想い起こさせてくれるのだ。(A.メルッチ『プレイング・セルフ——惑星社会における人間と意味』「驚嘆することへの讃辞」より)¹⁾

1. はじめに——惑星社会のもとでの“コミュニティでのフィールドワーク／デイリーワーク”にはいかなる意味があるのか

調査研究者と当事者が、長期にわたって日常的な実践を共有するかたちで協業を積み重ねるなかで、いかなる関係性を構築するのか、その関係性の動態にいかなる意味があるのか——

1) *The Playing Self: Person and Meaning in the Planetary Society*, New York: Cambridge University Press, 1996 = 新原道信・長谷川啓介・鈴木鉄忠訳『プレイング・セルフ——惑星社会における人間と意味』ハーベスト社、2008年、190-191ページおよび197ページ。以下、Melucci (1996 = 2008)。

本稿は、中央大学社会科学研究所のヨーロッパ研究ネットワークを母体とする共同研究チームである「惑星社会と臨場・臨床の智」（2016～2018年度）の研究活動に基づいている。本研究チームの〈エピステモロジー／メソドロロジー／メソツズ〉として、構築の途上にある“うごきの比較学（Comparatology of nascent moment）”は、イタリアの共同研究者との間の“対話的なエラボレイション（co-elaboration, coelaborazione, elaborazione dialogante）”によって創りあげられてきたものである。

本調査研究チームは、イタリアの社会学者 A. メルッチ（Alberto Melucci）の“惑星社会論（vision of planetary society）”と A. メルレル（Alberto Merler）の“社会文化的な島嶼性論（visione di insularità socio-culturale）”の理論を現代社会認識の基礎としている。調査方法としては、メルレルとの間で“コミュニティを基盤とする参与的調査研究（Community-Based Participatory Research (CBPR)）”²⁾を、メルッチ夫妻との間で“療法的でリフレクシヴな調査研究（Therapeutic and Reflexive Research (T&R)）”³⁾を構想し、練り上げてきた。

メルレルとメルッチに共通する〈エピステモロジー〉であるフィールドへの“臨場・臨床的な在り方（ways of being involved in the crude reality）”に基づき、新原道信編『“臨場・臨床の智”の工房——国境島嶼と都市公営団地のコミュニティ研究』（中央大学出版部、2019年3月）をとりまとめた⁴⁾。ここでは、イタリアのランペドゥーザ、宮古・石垣などの国境島嶼でのフ

2) “コミュニティを基盤とする参与的調査研究（Community-Based Participatory Research (CBPR)）”は、メルレルの研究グループ FOIST と新原が実践してきた方法であり（Cf. Alberto Merler, *Altri scenari. Verso il distretto dell'economia sociale*, Milano: Franco Angeli, 2011）、K. レヴィン、O. ボルダ、P. フレイレ等の流れを汲む。W. F. ホワイトが『ストリート・コーナー・ソサエティ』の経験に基づき提唱した「参与的行為調査（Participatory Action Research）」（Cf. William F. Whyte, *Street Corner Society: The Social Structure of An Italian Slum*, Fourth Edition, Chicago: The University of Chicago Press, 1993＝奥田道大・有里典三訳『ストリート・コーナー・ソサエティ』有斐閣、2000年）、ニューヨーク・ハーレムの公営団地でエスノグラフィック・フィールドワーク（EFW）を実践してきた二人の社会学者 T. ウィリアムズ（Terry Williams）と W. コーンブルム（William Kornblum）の方法と多くの共通点を持っている（Cf. Terry Williams and William Kornblum, *The uptown kids: struggle and hope in the projects*, New York: Grosset/Putnam Book, 1994＝中村寛訳『アップタウン・キッズ—ニューヨーク・ハーレムの公営団地とストリート文化』大月書店、2010年）。

3) メルッチは、編著書『リフレクシヴ・ソシオロジーにむけて—質的調査と文化』（Alberto Melucci (a cura di), *Verso una sociologia riflessiva: Ricerca qualitativa e cultura*, Bologna: Il Mulino, 1998）において、質的調査研究を中心とした多角的社会調査法の成果をとりまとめている。“療法的でリフレクシヴな調査研究”は、同書以後のメルッチ最晩年の企図を再構成した調査方法である。メルッチの最晩年の企図については、新原道信「A. メルッチの“未発のリフレクション”—痛むひとの“臨場・臨床の智”と“限界状況の想像／創造力”」矢澤修次郎編『再帰的＝反省社会学の地平』東信堂、2017年を参照されたい。

4) 本調査研究チームは、社会的痛苦の縮減—痛苦の増大を抑止し、縮減にむけての“多系／多茎の可能性”を誘発する“うごき”に密着するかたちで、“惑星社会／内なる惑星のフィールドワーク（Exploring the Planetary Society/Inner Planet）”および“コミュニティでのフィールドワーク／デイリーワーク

イールドワークと、立川・砂川やイタリアなどでの都市コミュニティの研究というフィールドワークの“対位法 (punctus contra punctum, contrappunto, counterpoint)”⁵⁾を通じて、地球規

(Fieldwork/Dailywork within the living Community)”を行ってきた。同書は、この〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉のために、“対話的／対位的に (dialogically and contrapuntally)”になされてきたフィールドワーク／デイリーワーク、そしてこの調査研究の“土台・足場 (base)”であり“基点／起点 (anchor points)”となっていた調査研究者の“コミュニティ (“臨場・臨床の智”の工房)”の研究である。

同書に先立つ新原道信編『“境界領域”のフィールドワーク—惑星社会の諸問題に回答するために』(中央大学出版部、2014年)においては、〈エピステモロジー／メソドロロジー／メソツズ／データ〉のとりまとめと、オランダ、カーボベルデ、サルデーニャ、コルシカなどでの“惑星社会のフィールドワーク (Exploring the Planetary Society, Esplorando la società planetaria)”の成果を提示した。

続いて、新原道信編『うごきの場に居合わせる—公営団地におけるリフレクシヴな調査研究』(中央大学出版部、2016年、以下、新原(2016a))においては、“コミュニティを基盤とする参与的調査研究 (Community-Based Participatory Research (CBPR))”と“療法的でリフレクシヴな調査研究 (Therapeutic and Reflexive Research (T&R))”の組み合わせによる「コミュニティでのフィールドワーク／デイリーワーク」の成果をとりまとめた。

本書はこれらの共同研究による著作の続編となっている。構成は以下のとおりである：

序章 何をめざし、何を試みたのか—惑星社会と“臨場・臨床の智” 新原道信

第Ⅰ部 “国境地域／境界領域”をめぐるフィールドワーク

第1章 国境島嶼における平和裏の戦争状態—「同時代のこと」に回答する石垣島の反基地運動 鈴木鉄忠

第2章 イタリアの“国境地域／境界領域”から惑星社会を見る—ランペドゥーザとサンタ・マリア・ディ・ピサの“臨場・臨床の智” 新原道信

第Ⅱ部 都市公営団地をめぐるフィールドワーク／デイリーワーク

第3章 立川プロジェクトの始動—新たな「契約」の行方 阪口毅

第4章 立川プロジェクトの展開—立川団地での「問い」の深化 大谷晃

第5章 立川プロジェクトからの展開—戦時下の昭島市域における「八清住宅」と人々の移住 鈴木将平

補論 いくつもの「もうひとつの立川プロジェクト」 阪口毅・大谷晃・鈴木将平編

第Ⅲ部 乱反射する生身のリフレクション

第6章 吹き溜まりの不定根—「その後」の湘南プロジェクト 中里佳苗

第7章 「同時代のこと」に回答する“臨場・臨床の智”—かたちを変えつつうごいていく“智”の工房 新原道信

むすびにかえて 天田城介

あとがき 新原道信

- 5) イタリアのランペドゥーザ、宮古・石垣などの国境島嶼でのフィールドワークと立川・砂川やイタリアなどでの都市コミュニティの研究は、「遠く／近く」という対比であると読まれる可能性もあるが、「いま私たちは、『遠い／近い』と分けられない惑星社会を生きている。惑星社会においては、『遠い／近い』『マクロ／ミクロ』『グローバル／ローカル』は、再帰的に循環し、衝突・混交・混成・重合を常態としている。二項対立の思考態度 (mind-set) に縛られている私たちの認識や知覚の在り方 (ways of being) を流動化させることなく、この現に起こりつつある現代的／現在の社会現象を把握することは出来ない。そのためには、対位的な“うごき”が必要となる。しかも、「断言」的にそう言い放つだけでなく、デイリーワークとして自ら“[何かを] 始める (beginning to)”ことをやり続けるしかない、私たちは考えた(新原道信「何をめざし、何を試みたのか—惑星社会と“臨場・臨床の智”」(新原道信編『“臨場・臨床の智”の工房—国境島嶼と都市公営団地のコミュニティ

模の複合的諸問題に応答する“臨場・臨床の智”を探求した。

根本的な「問い (domanda decisiva)」は、〈地球規模の複合的諸問題に応答する“臨場・臨床の智”——惑星地球をひとつの海として、そのなかに浮かぶ島々として社会を体感するような“智”——を、いかにして紡ぎ出すのか。地球の、他の生き物の、他の人間の悲鳴を“感知し (perceiving / sensing / becoming aware)”, “感応する (responding / sympathizing / resonating)” ことはいかにして可能か。フィールドワークによって惑星社会を理解し行為することは可能か) である。

すなわち、いかにして“惑星社会の諸問題を引き受け／応答する (responding for/to the multiple problems in the planetary society)” のかというものだった。この根本的な「問い」は、さらに“対話的／対位的な問いかけ (dialogic and contrapuntal asking questions)” へと展開していく。

①これまで本研究チームが行ってきた海外でのフィールドワークを、狭義の“惑星社会のフィールドワーク (Exploring the Planetary Society)” と位置付け、②国内で長期にわたって同一のフィールドと深くかかわる調査研究を、“コミュニティでのフィールドワーク／デイリーワーク⁶⁾” と位置付けた。すなわち、自然や資源の有限性、社会の統治性の限界などの惑星社会の諸問題に応答するための、“対話的／対位的な” フィールドワークである。

研究』中央大学出版部、2019年、22-30ページ。以下、新原（2019）。

6) 特定のフィールドに長期にわたってかかわり続けるというスタイルでフィールドワークを行う場合、「フィールド」に出て調査に意識を集中させている時間以外のほとんどすべてを「フィールド」として、自覚的に行うべき「デイリーワーク」が含まれている。調査研究においては、なんらかの〈テーマとリサーチ・クエスチョン〉に即してのフィールドワークを行っていくとしても、むしろ「デイリーワーク」においては、遭遇した予想外の出来事や困難の意味を解析することが、後になって大きな意味を持つことが少なからずある。シカゴ学派の流れを汲む H. ベッカー (Howard S. Becker) によれば、社会科学者の仕事は、「それが本当かどうかを判断することではない。「他者があるものを一定の貴重なカテゴリーから締め出そうとする」プロセスを明らかにすることである。そして、「(規範と効率性は常に追求され) ねばならない」という大前提 (効率性とそれ以外に分割し、後者を残余カテゴリーとして扱い、「その他」と一括されたものは考慮しなくてもよいとする) を一度よしてみることで、効率性とカオスの中間に位置する現実を分析する可能性を確保すること、「トラブル、例外、適合しないもの」を探索することである。Howard S. Becker, *Tricks of the trade: how to think about your research while you're doing it*, Chicago: University of Chicago Press, 1998 = 進藤雄三・宝月誠訳『社会学の技法』恒星社厚生閣、2012年、194-200、262ページ。

シカゴ学派の「職人芸」は、「その他」を拾い集め、「トラブル、例外、適合しないもの」の連続に対して、私たちがなんとかあきらめずに、「日々の野良仕事 (デイリーワークとしてのフィールドワーク)」を続けていくときの力となってくれた。「野良仕事」とは、すなわち、院生・学生たちといっしょに、フィールドに出ていって、「ズボンの尻」を汚すかたちの泥くさいフィールドワークをデイリーワークとして行い、膨大な議論を積み重ねる。さらには、フィールドで出会った人たちとの濃密なやりとり・切り結び、ひとのつらなりのなかで、独自の調査研究スタイルを集団的に創り上げていくという営み、フィールドで、自分たちが依拠してきた枠組みを学びほぐしていく (learning/unlearning in the field) 営みである。

上記①の“惑星社会のフィールドワーク”に基づき、2018年12月8日には、中央大学駿河台記念館で、第27回中央大学学術シンポジウム「地球社会の複合的諸問題への応答 (Responses to the Multiple Problems in the Planetary Society)」を開催し、社会科学系の研究者および本シンポジウムに関心を持つ市民との間で対話の機会を持った。

上記②の“コミュニティでのフィールドワーク／デイリーワーク”とのかかわりでは、2019年2月2日、東京・目白の和敬塾に於いて、前川財団第9回未来教育シンポジウム「社会の子どもたち」が巣立つ“共創・共成”コミュニティ」というシンポジウムを行っている（以下、「未来教育シンポジウム」）。ここでは、ひとつの「プロジェクト」をともに創りあげてきた立川団地と中央大学の協業の軌跡をふりかえり、聴衆に伝えることで、子どもの教育に関心を持つ市民や教育・心理・歴史などを専門とする研究者との間での対話の機会を得た。

刊行書に加えて、このふたつのシンポジウムは、本研究チーム（「惑星社会と臨場・臨床の智」）にとって、〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉の軌跡と到達点を、他者に「叙述／伝達」する機会であり、そこでのやりとりは、上記の根本的な「問い (domanda decisiva)」に回答していくための“基点／起点 (anchor points, punti d'appoggio)”⁷⁾となるものであった。

本調査研究チームは、“臨場・臨床”の場（フィールド）において、“対話的にふりかえり交わり (riflessione e riflessività)” 続けるというリフレクシヴな在り方を、メルッチ、メルレルとともに実践してきた。この流れからも、下記のシンポジウムに即してのリフレクションを行う必要があると考えた⁸⁾。

7) “基点／起点 (anchor points, punti d'appoggio)” は、“根 (radice)” が流動化する“臨場／臨床”の場に現れるところの可変的な均衡点という意味で、A.メルッチの「アンカー・ポイント (anchor points, punti d'appoggio)」に照応する。メルッチは、整序された物語として「私が何者であるのか」という問いに答えることが困難な時代にあって、ますます求められるものとして「しっかりと錨をおろせる場所 (anchor points = punti d'appoggio)」(Melucci (1996=2008), 3ページ) を考えている。彼の言葉から連想するなら、アーチェリーで矢を放つときにかまえを安定させるための動的な均衡点であり、うごきのなかにあるものがさらにうごいていくため錨をおろす場所であり、流動する根、うごきの萃点である。

8) メルッチは、過去になされた調査活動のプロセスを省察することの意義について、下記のように述べている：

調査対象の当事者における創造力を調査研究するということは、その創造のプロセスを理解するための認識の方法を研究グループ自身が創造しているのかという問題も含めてリフレクシヴとならざるを得なかった。この意味でのリフレクシヴな調査研究のあり方、自らが観察するものへの視線のあり方を自らにも向けるというあり方は、これまでの異なる位相で行われた調査の歴史すべてにも向けられ、これまでこれからの調査活動のプロセスすべてに対して、徹底的なリフレクションを求めることになる。こうして、調査研究の成果のとりまとめにあたっては、創造活動そのものと同時に、その活動を理解しようとした認知のプロセスそのものにも焦点をあてることとなった (Alberto Melucci, “Verso una ricerca riflessiva”, registrato nel 15 maggio 2000 a Yokohama, 2000=新原道信訳「リフレクシヴな調査研究にむけて」新原道信編『“境界領域”のフィールドワーク—惑星社会の諸問題に回答するために』中央大学出版部, 103ページ)。以下, Melucci (2000

上記①の〈なぜいま社会（科）学は、惑星社会／内なる惑星のフィールドワークから始める必要があるのか、とりわけ国内外の「遠き“端／果て”」でのフィールドワークは、現代社会認識に寄与するのか、いかなる意味があるのか〉については、シンポジウム叢書（新原道信・宮野勝・鳴子博子編『地球社会の複合的諸問題への応答』中央大学出版部、2019年）において応えることとしたい。

上記②の〈惑星社会という状況下での“コミュニティでのフィールドワーク／デイリーワーク”には、いかなる意味と課題があるのか〉という「問い」については、「未来教育シンポジウム」の企画・開催をめぐって、地域のコミュニティと調査研究者のコミュニティ、聴衆との間でなされたやりとりを事例として、本稿において応えることとしたい。

上記②の「問い」に応えることを通じて、社会調査におけるふたつの主体（調査者／当事者）の関係性について、メルッチが遺した下記の課題をさらに深化させることが、本稿の眼目である：

- ①調査者の使命は、その能力を、あくまで新たな認識を生産することのみに活用することである。
- ②当事者は、調査者の手元にはない有意の情報を調査者にもたらし必要がある。
- ③調査者は調査によって獲得した新たな認識をなんらかのかたちで当事者のもとに返す必要がある。そして調査に応じた当事者もまた他の当事者に新たな認識を返す必要がある。そこで重要となるのは、結果の伝達を通じての直接的なコミュニケーションそのものであり、もし直接的なコミュニケーションが困難な場合でも、書籍や報告書などを通じて、獲得した新たな認識を公共の場に開示することが必要となる⁹⁾。

メルッチは、非対称性と異質性を含み混んだ「調査者／当事者」の関係性を「契約」¹⁰⁾とい

= 2014).

9) Melucci (2000=2014), 99 ページ.

10) メルッチは、調査者と当事者（自らの行為のリフレクションをしていくという意味での調査者でもある）との関係性を「契約」という言葉で表している：

社会調査における人間の関係性は、調査にかかわる調査者と当事者の双方が、一定の書式を持った書類にサインをするといったかたちでの契約とはなっていない。そこでは、利害関心と目的に関する何らかの一致点があるかないかが問題となる。調査者と当事者間の利害関心と役割があまりにも異なっている場合には、調査者が社会調査を実施したとしても、当事者は調査者にとって意味のある情報の提出を拒否することが出来るし、わざとねじ曲げて伝えることも出来る。調査者と当事者の利害関心と役割に関する距離感がきわめて小さい場合には、調査者の調査目的が優先した調査が行われるか、あるいは、当事者の意志と目的に従うかたちで調査者は調査をする装置と化す。従って、ここでの契約とは、紙面上のサインの話ではなく、お互いの距離を確認し適切な間隔を設定することを意味している。Melucci (2000=2014), 99-100 ページ.

う言葉で、「調査者／当事者」間の関係性の“うごき (nascent moments of relationship)”を、「遊び (gioco, play)」¹¹⁾ という言葉で表現している。メルッチが着目しているのは、「調査者／当事者」の「契約」と関係性の「遊び」、すなわち、「調査者／当事者」が、関係性を“切り結び続ける (ricostellando la relazione, reconstellating the relationship)”こと、そのなかで、“関係性が切り結び直される瞬間 (nascent moments in reconstellation of relationship)”である。この“関係性の動態を感知する (perceiving the roots and routes of relationship)”ことを基軸として、“コミュニティでのフィールドワーク／デイリーワーク”の意味と課題を考えたい。

本稿は、“複数の目でみて複数の声を聴き、複数のやり方で書き／描き遺していく”というスタイルで行ってきた〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉の試みについて、参加者の一人によってなされた「可能な筆写 (trascrizione) のひとつであるに過ぎない」¹²⁾。それゆえ、他の参加者によって、より深化した洞察が提示されることを予想し期待している。

以下、本稿では、第 2 節で本稿におけるリフレクションの“舞台 (arena/scena)”である「未来教育シンポジウム」の射程と開催の背景について確認し、第 3 節では基調報告と全体の構成の意味について、第 4 節では質疑応答からの論点整理を行い、第 5 節では学生の葛藤とリフレクションについて考察し、第 6 節では、この〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉の試みが何をめざし、何を試みたのかを確認し、第 7 節で〈惑星社会という状況下での“コミュニティでのフィールドワーク／デイリーワーク”には、いかなる意味と課題があるのか〉という問いへの応答を試みる。

11) ここでの「遊び」はネジの「遊び」という含意から派生しており、ゆるく固定されたピボット・ピンのように揺れうごく関係性の「遊び」は、調査そのものにも個々の調査研究者にも起こっているものである。メルッチは、以下のように述べている：

調査者と当事者は、同じフィールドで調査という体験をともにするプレーヤーである。……調査者も当事者も、自らの境界を揺り動かし、パートナーの動きと変化する周囲の環境に応じて動く。……両者の関係性そのものの動きを、リフレクションとメタ・コミュニケーションの場を含みこまざるを得ない。……その関係性の「遊び」自体が調査のプロセスとなっている……関係性の「遊び」によって、社会調査が主観から分離された客観的な現実を忠実に映し出すという幻想はこわれてしまう。……本当の意味で調査者と当事者の間に適切な距離を得るためにはこのメタレベルの認識が必要である (Melucci (2000=2014), 100-101 ページ)。

12) 下記のメルッチの言葉の意味においての可能なリフレクションのひとつであることを含意している：

私は、これまで日常生活における諸活動に関して、“創造力 (creatività)”という概念によって調査研究をすすめてきた。そこには、調査に協力してくれた当事者との間のコミュニケーション行為、そこで調査者との間に築かれていた関係性についての一貫した深い関心があった。そのなかで、この関心をさらに深化させ、観察における調査者側のコミュニケーション行為を把握することを欲した。すなわち、その調査は、調査研究グループ自身の自らへのリフレクションを含みこみ、そこでは、そのリフレクションの結果も調査の成果に組み込まれるというものである。しかしながら、こうした調査の成果のなかに、現実がすべて描き尽くされるわけではなく、あくまで可能な筆写 (trascrizione) のひとつであるに過ぎない (Melucci (2000=2014), 101-102 ページ)。

2. 「未来教育シンポジウム」の“舞台裏 (retroscena)”

以下では、立川団地と大学側との“出会い”の段階から、シンポジウムをともに開催するという「契約」とその準備までの“関係性の動態”を確認していく。本調査研究グループは、「3.11以降」、原発・震災問題も含めた惑星社会の複合的な問題、とりわけ「地域社会の解体と再編」の問題を抱える被災地と、「高齢化・無縁化」などの問題を抱える都市公営団地との関係に着目し、日本とイタリア（ミラノ、サッサリ、トリエステなど）の共同研究者と連絡をとりあいながら、2012年より立川・砂川地区の立川団地¹³⁾との間で長期的関係を取り結び、下記のような〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉の試みに着手した：

- (1) 調査研究グループの形成：初期シカゴ学派的な研究集団（現場主義、小集団による問題発見、多声の確保による調査研究アプローチの錬磨、メンバーの世代交代と智の継承などの側面を持った「(コミュニティを研究する) 調査研究者の知的コミュニティ」をめざし、若手研究者・院生・学生によるコミュニティ形成活動の母体として「立川プロジェクト」を立ち上げた。
- (2) 調査者育成プログラムの構築：新原が担当する4つのゼミ（大学院文学研究科と文学部の社会学専攻、FLP¹⁴⁾ 地域・公共マネジメント、FLP 国際協力の各ゼミ）の有志により、講義・ゼミ・研究会を有機的に組み合わせ、“コミュニティを基盤とする参与的調査研究”と“療法的でリフレクシブな調査研究”を習得し、デイリーワークとしてのフィールドワークを行う調査研究者育成のプログラムを中央大学内に構築した。
- (3) 調査研究の理論と方法の錬磨：立川団地自治会・住民の方々との協力体制により初期

13) 江戸時代の新田開発によって生まれた砂川村に、大正時代に基地がつくられ、第二次大戦後の砂川闘争を経て、米軍基地跡地の周辺地区に、立川団地が造成された。立川団地は、本調査研究グループとのかかわりの始まった2012年6月頃には、65歳以上890人（内、一人暮らし300人）、車椅子12人、聴覚障害者3世帯、特別依頼訪問6世帯を抱えていた（高齢化率27.8%）。2000年の三宅島噴火の避難者受け入れ経験を活かすかたちで「3.11」の直後、避難者受け入れを開始（2011年3月28日に20世帯60人受け入れ、4月19日より新たに45世帯185人の受け入れ、9月に入り岩手県・福島県より10世帯・50人が入居）、出身地域は、福島県（相馬市、南相馬市、いわき市、富岡町、大熊町、双葉町、浪江町、広野町）、宮城県（石巻市、塩釜市、仙台市、南三陸町）、岩手県に及んでいた。避難者の80%以上は、帰宅困難な高齢者か幼児連れの家族であり、土地や地縁、職場、知人とも引き離されたという「出郷」の問題に加えて、原発による強制避難／自主避難／津波での避難などの条件のちがいによる補償の格差の問題が存在していた。

14) Faculty-Linkage Program は、中央大学内の教育制度で、学際的な領域の問題解決能力を育成するプログラムとして、「環境・社会・ガバナンス」「ジャーナリズム」「国際協力」「スポーツ・健康科学」「地域・公共マネジメント」を開設している。新原は、このなかで「国際協力」と「地域・公共マネジメント」のゼミナールを担当し、フィールドワークにより国際社会／地域社会の現実に迫ることを企図する学生が中央大学内の全ての学部から参集し、学んでいる。

段階の調査（フィールドの講造認識・分析，データ収集，フィールドでの諸活動への持続的参加システム構築等）を行い調査研究方法の錬磨・修正をすすめた。

- (4) コミュニティ形成の条件析出：立川団地を中心とした調査結果に基づき，異質性を含み混んだ持続可能なコミュニティ（地域のコミュニティと大学の調査研究コミュニティ）形成の条件を考察した。

2012年以降は，団地の各棟の代表が集まる役員会や主要な行事の事前会議も含め，すべてにおいて協業関係を持続するなかで，「立川プロジェクト」のメンバーは，砂川地区において，「中大生」として認知されるようになり，活動の領域は，砂川地区の他の諸組織・団体へと拡がった。こうしたフィールドへの「参与」と同時に，大学内では，立川プロジェクト内に複数の調査研究グループを結成し，グループ・個人ごとに，「砂川」「迷惑施設」「開発」「中心と周辺」「子ども」「昭島・基地跡地」「地域組織」「キーパーソンの語り」など，調査研究テーマと視点を深化させ，対話的なりフレクションを重ねていった。調査方法についても，行事ごとの担い手の配置と関係についての mapping や，イベントの機能的分析，空間的分析，初期シカゴ学派の手法との比較などが行われた¹⁵⁾。

調査研究活動は，地域の状況とリズムに応答するかたちで，“かたちを変えつつうごいていく（changing form）”ことを基調として行われた。そのなかで，長期にわたる地域活動で獲得した信頼関係に基づき，砂川地区のコミュニティのなかで“社会の子どもたち”が巣立つ試み——お互いに学びあい，自ら学ぶ子どもたち（未来のコミュニティの担い手）が育つ／大人も育つという共創・共成型のコミュニティ形成——へと，協業の内容を少しずつ変化させていった。加えて，この changing form は，地域のコミュニティと調査研究コミュニティが〈合わせ鏡〉のように構成され直し続けていくという特徴を持っていた¹⁶⁾。

15) 立川プロジェクトの形成と展開については，新原道信編『“臨場・臨床の智”の工房—国境島嶼と都市公営団地のコミュニティ研究』中央大学出版部，2019年の第Ⅱ部，阪口毅・大谷晃・鈴木将平による「都市公営団地をめぐるフィールドワーク／デイリーワーク」の第3章から第5章および補論，211-374ページを参照されたい。この初期段階での知的コミュニティ形成のプロセスは，奥田道大が初期シカゴ学派について言及した下記の言葉と符合するものであった。すなわち，「社会学上の新しい事実発見と解明が，都市，社会，あるいは個別ケースの当事者に『コンサルテーション』の機能をもつことに他ならない」「臨床社会学」の構想という言葉である（奥田道大「訳者解題」Faris, Robert E.L., with a foreword by Morris Janowitz, *Chicago sociology, 1920-1932* (The heritage of sociology), Chicago: University of Chicago Press, 1970 [1967] = 奥田道大・広田康生訳『シカゴ・ソシオロジー：1920-1932』ハーベスト社，1990年，234ページ）。

16) 〈合わせ鏡〉のような関係性の構築は，“コミュニティを基盤とする参与的調査研究（Community-Based Participatory Research (CBPR)）”の国際的な調査研究ネットワークへの貢献をもたらしている。Cf. Alberto Merler and Andrea Vargiu, “On the diversity of actors involved in community-based participatory action research”, in *Community University Partnerships: Connecting for Change*:

立川団地は、日常的な自治会活動のなかで、団地住民が防災・相互扶助の仕組みをわがものとするための工夫として、運動会、夏祭り、防災ウォークラリーなどの行事を企画・運営し、様々な意図をもった参加者を受け入れ、「活躍の場」を創ってきた。担い手を「協力員」というかたちで募り、こうした営みが「なぜか気になる」「抜けられない」というひとたちが出てきて、その後も恒常的にかかわっていくようになるという「立川団地スタイル」を、前会長のSさんの時代に確立していた。そしてまた、自治会役員のグループとは相対的に自立するかたちで、女性たちによる「子育て」支援などの活動をするグループが、団地の諸活動の両輪として機能しているという希有な特徴を持っていた。

他方で、新原が担当する4つのゼミは、様々な背景をもったゼミ生を受け入れ、そのなかにいくつかの相対的に自立したグループの活動¹⁷⁾が〈合わせ鏡〉のように存在していたが、立川団地との協業をすすめていくなかで、〈合わせ鏡〉の関係性をより自覚的に構築していくようになっていった。

立川プロジェクトのメンバーは、「ハレ」の舞台である各行事のみならず、役員会や準備会などの日常的実践の場にも参加させてもらうかたちで、「制度」や「仕組み」の背後にある団地内の諸個人の関係性の動態を理解していく機会を与えられた。その理解は、大学内での報告会、フィールドノーツや報告書のかたちで蓄積されてきたが、どのように団地の方々に理解を「返す」のかが、今後の課題となっていた（団地の方々からも理解の応答を求められていた）。

「返礼」のひとつとして、2016年11月に、立川団地以前の〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉の経験を取りまとめた『うごきの場に居合わせる——公営団地におけるリフレキシヴな調査研究』（中央大学出版部、2016年）¹⁸⁾を謹呈し、2016年12月に企画された団地役員と

proceedings of the 3rd International Community-University Exposition (CUexpo 2008), May 4-7, 2008, Victoria, Canada. Victoria, University of Victoria, 2008; Andrea Vargiu and Stefano Chessa, Mariantonietta Cocco, Kelly Sharp, "The FOIST Laboratory: University Student Engagement and Community Empowerment Through Higher Education, Sardinia, Italy", in Rajesh Tandon, Budd Hall, Walter Lepore and Wafa Singh (eds.), *KNOWLEDGE AND ENGAGEMENT. Building Capacity for the Next Generation of Community Based Researchers*, New Delhi: UNESCO Chair in Community Based Research & Social Responsibility in Higher Education. Society for Participatory Research in Asia (PRIA), 2016, pp.208-217.

上記のような報告や刊行物によって、立川の事例は先進的であると評価され、UNESCOで同様のプロジェクトをすすめるRajesh Tandon (PRIA, India), Budd Hall (University of Victoria, Canada) や、ブラジル・エスピリトサント連邦大学との連携にも着手している。

17) サブゼミや読書会、各種のプロジェクトなどの、院生・学生の主導による諸活動については、阪口毅「立川プロジェクトの始動—新たな「契約」の行方」新原道信編『“臨場・臨床の智”の工房—国境島嶼と都市公営団地のコミュニティ研究』中央大学出版部、2019年、249-263ページで詳述されている。以下、阪口(2019)。

18) 同書では、1990年代後半から2000年代半ばにかけて行った“コミュニティでのフィールドワーク／デイリーワーク (Fieldwork/Dailywork within the living Community)”のプロジェクトの成果をと

の「忘年会」の場で、これまでの参加者一人一人による理解の開示がなされた。

こうした大学と地域の協業の試みに対して、理解を示してくれたのが前川財団であった。「家庭・地域社会の教育の研究および実践を支援」している前川財団は、年2回ほどのペースで「未来教育シンポジウム」を開催してきた。今回のシンポジウムにおいては、これまでなされてきた教育学・心理学などのアプローチから少し離れたかたちで、「子育て」の背景となる地域社会・コミュニティの形成をテーマとしてシンポジウムを企画することが要請された。

これまでの流れから、シンポジウム会場には、「まちづくり」「コミュニティ・デザイン」「高齢化」などよりも、「教育」「子育て」に関心を持つ聴衆が参集することが予想された。そこで、事務局と話し合い、「子どもたちが、惜しみなく与える大人たちの背中を見ながら地域で育てられ、その子どもたちが、いつかは、地域を創る人間として巣立っていく」という文脈で、報告・討議を組み立てることを立案した。その眼目は、子どもたちの育成という development を、〈家族という親密圏／支援制度・システム／全体社会〉という枠組みだけでなく、〈地域社会／コミュニティ〉の形成というもうひとつの development の要素を組み込んで考えるというものだった。こうして、本シンポジウムは、①全景把握としては、メルッチの惑星社会論に依拠しつつも、②本稿冒頭のメルッチの言葉によるなら、「子どもたち」「(地域での子育てとかかわる) 伝統的文化」などへの着目とかかわるものとして位置付けられた。

このような申し出に対して、新原から団地側への相談がなされ、シンポジウムへの協業の意志を確認した(メルッチの言葉でいえば「契約」の結び直しであった)¹⁹⁾。「未来教育シンポジウム」は、これまで二者の関係性に着目しつつ協業の関係性構築を模索してきた立川団地と立川プロジェクトのメンバーにとって、第三者の前で自らの関係性の到達点を開示するという意味を持った。それは、2012年より7年間にわたって創られてきた関係性の深化／変化——恒例行事の準備段階から活動をともにすること、そこでの理解を「返す」というかたち——そのプロセスを、「団地自治会役員・住民と立川プロジェクト参加者(卒業生も含まれる)」という「ひとつのチーム」で、関係性の動態(進行形のふたつの development)をふりかえり、その成果を他者に照射するという企図であった。

登壇者の新原、阪口、大谷、H会長と事務局のSさんを「名代」としつつも、団地からは、

りまとめた。ここでは、インドシナ難民、日系、南米系、帰国者、移民、地方出身者などが集住し、衝突と出会いをくり返していた公営団地におけるコミュニティ研究と、“移動民の子どもたち(children of immigrants)”のネットワーク研究を行った。

19) 2018年夏、自治会役員諸氏にむけて新原が手紙を出し、夏祭りの反省会後、あらためて打ち合わせを行った。以後、大学では立川プロジェクトの参加者による理解をとりまとめ、2018年12月8日に団地での「報告会」を行い、2019年2月2日にむけて準備すべきことを確認した。自治会側からの「名代」として登壇するH会長と事務局のSさんは、阪口毅と大谷晃との間で事前の打ち合わせを行い、「立川団地プロジェクト」というひとつのチームとして、何を、どのように聴衆に伝えるのかについての確認と準備を行った。

自治会役員のみならず、「子育て」支援グループ、子ども会、老人会などの住民の方々、大学からは、「立川プロジェクト」に参加してきた院生・学生、会社員、自治体職員などとして働く卒業生が、シンポジウムに参加した²⁰⁾。このような背景を持つことから、登壇者の言葉は、立川団地での試みを「他所（よそ）の事例」として聴く参加者にむけて発せられると同時に、この場で語られている「立川団地」と「中央大学」の当事者からの「まなざし」を意識したものとなっていた²¹⁾。

シンポジウムの場合は、第一に、「話し手」「聴き手」それぞれが、自らがかわった「ひとつのプロジェクト」をふりかえるという内省的なリフレクションの機会であった。第二に、今回のシンポジウムは、これまで大学から団地へという方向性のなかで推移してきた関係性が、ともに多摩（西東京）から都心の目白にまで足を運び、シンポジウムの聴衆という第三者の前で「自らを開く」ことによって、これまでの“関係性が切り結び直される瞬間”であった。第三に、「自らを開く」に際しては、関係性「について語る」という在り方ではなく、会場において生身の関係性そのもの「を体現・再現する」かたちをとられた。第三者の前で「自らを開き、体現・再現する」ことによって、「ひとつのチーム」としてのアイデンティティが形成される瞬間となっていた。

以上のように、「プロジェクト」参加者の「住民・学生」が、“臨場・臨床的な在り方 (ways of being involved in the crude reality)” を分かち持つことによって、ソクラテス・プラトンに由来する厳密な意味での“シンポジオン (Συμπόσιον)”，“智の饗宴 (simposio di cumscientia)” として、「未来教育シンポジウム」を“ともに（共に／伴って／友として）創る”こととなった。そしてまた、「プロジェクト」参加者にとっては、今回のシンポジウムにおける“共創・共成”が、共通の記憶となり、双方向的・多系／多茎的・直接的に言葉を交わし、自らの関係性および営みをふりかえっていくという“乱反射する生身のリフレクション (dissonant crude reflection, riflessione disfonica cruda)” の“基点／起点 (anchor points)” となることを予感していた。

20) 内訳は、参加者の記録と目測によれば、団地から10数名、「立川プロジェクト」の現役メンバー20名弱、「卒業生」10名程度の計40名程度、「子育て」「家庭教育」などに関心を持つ聴衆が、さらに40名超の参加者であった。

21) トゥレーヌの『声とまなざし』(Alain Touraine, *La voix et le regard*, Seuil, 1978 = 梶田孝道訳『新装 声とまなざし—社会運動と社会学』新泉社, 2011年)という「社会学的介入」の関係性が、当事者の「声」と社会学者の「まなざし」を厳密に区分するものであったのに比して、調査研究者／当事者の「名代」からの「声」に対して、フィールドワーカー／当事者の「まなざし」が、反射的に「衝突・混交・混成・重合」という“乱反射するリフレクション (dissonant reflection, riflessione disfonica)” の構造を持つプロセスであり、“対話的にふりかえり交わる場 (luogo di riflessione e riflessività)” であった。トゥレーヌの「社会学的介入」における研究者／当事者の関係性については、新原道信「社会学的介入」日本社会学会理論応用事典刊行委員会編集『社会学理論応用事典』丸善出版, 2017年, 630-631ページを参照されたい。

3. “社会の子どもたち”が巣立つ“共創・共成”コミュニティにむけた 〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉の試み

本節では、「名代」による当日の報告と「住民・学生」による「見届け」までの“関係性の動態”に着目する。

本シンポジウムは、地域のなかのコミュニティ形成と、大学のなかの〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉に取り組む「コミュニティ」形成を通じての「子どもたち」の育成（すなわち地域社会発展とひとの育成というふたつの development の追求）の試み——生活の場に居合わせ、声を聴き、要求の真意をつかみ、様々な「領域」を行き来し、〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想する試みをふりかえり、発信するという意味を持っていた。

発信の主体は、この7年間で形成されてきた立川団地／中央大学という「ひとつのチーム」——大学と地域という非対称性を持ちつつも、課題（育成や継承）や目的（異質性を含み混んでのふたつの development の追求）で重なるところのある個々人が“寄せ集まるという骨折り（spezzare le ossa per essere eterogeneo）”によって限定的に立ち現れている「結衆」²²⁾のかたち——であり、当日の参加者を含めての「直接的なコミュニケーション」をめざしての構成であった。

その「結衆」は、出自は異なりつつも〈合わせ鏡〉のような関係性を持つふたつの「コミュニティ」の間でなされてきた変化への応答と“共創・共成”への願望と企図の総体であった。

立川団地の自治会役員は、若い層が10年しか住めないという規則もあり、担い手となる「子育て」世代が減少するなかで、新たな担い手の育成と引き継ぎを課題としている。立川団地とかわりつづける院生・学生たちの母体となっている「立川プロジェクト」は、新原が担当するゼミのなかから参集した有志の集団であり、数年で確実にメンバーは入れ替わり、新たな担い手の確保と継続は、きわめて不確定であり、常に焦眉の課題として存在している。

自治会役員、学生・院生という、入れ替わりを必然とするふたつの「コミュニティ」が、相互補完的なかたちで、2012年以降、継続的に関係を構築し続け、両者は、お互いの「コミュニティ」の継続・継承にも想いを馳せる（caring）かたちでの創意工夫を試みてきた。

シンポジウム当日は、新原が基調報告を行い、つづいて阪口毅と大谷晃（『“臨場・臨床の智”の工房』第3章と第4章の執筆者でありプロジェクトの立ち上げ段階から参加した）が短い報告を行った。阪口毅は、学生たちの活動と団地側の活動全体について、とりわけこの関係性の立ち上げの時期であった2012年からの数年間を中心に理解をとりまとめ、報告した。大谷晃は、学生たちがグループに分かれてとりまとめた理解の「名代」として、団地の諸活動の理解・意

22) 「結衆」という言葉は、桜井徳太郎『結衆の原点—共同体の崩壊と再生』弘文堂、1985年から着想を得ている。

味付けを報告した。その後、パネルディスカッションのかたちで、立川団地連合自治会のH会長と事務局のSさん（お二人とも「子ども会」「子育て支援」にかかわってこられた）による活動の紹介の後、会場から紙面等で寄せられた質問に応えるかたちで討論を行った。

通常このようなシンポジウムにおいて、「現場の方たち」が「来賓」として招待されることはあっても、調査研究者と当事者が渾然一体となって、ひとつのセッションをつくる（そこまでの関係性がすでにつくられている）ということは、めったに無い（在り難い）ものであった。

基調報告は、「教育」「子育て」に関心を持って参集した聴衆と、これまでの「協業」の試みをともししてきた立川団地住民・自治会役員、院生・学生たちにむけて、以下のような骨子でなされた：

- ① “社会の子どもたち”とは、社会の「作り／創り手」として巣立っていく地域の子どもたちと大学生の双方を指す言葉である。
- ② “コミュニティ”とは、多種多様なひとたちが、ただそのまま在ることが認められるような「地域のコミュニティ」と「(地域と息長くかかわる) 大学人のコミュニティ」の双方、そして両者のゆるやかな「網の目」による〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉の全体が含意されている。
- ③ “共創”とは、“たったひとりで異郷／異教／異境の地に降り立つ”子どもたちが巣立っていく「コミュニティ」を、大学と地域の双方で、大学と地域の間、“ともに（共に／伴って／友として）創ることを始める”ことである。
- ④ “共成”とは、大学と地域が〈合わせ鏡〉で、「存在しているものは何であれ、ただ存在するということのみによって静かに尊重されるような」²³⁾ ひとのつながりに“ともに”成り続けることである。
- ⑤ “大学と地域の協業”とは、大学と地域が〈合わせ鏡〉で、同時的・対位的・継続的に、“多系／多茎の可能性”を持った「コミュニティ」をともに創ることで、社会を創る試みである。

23) メルッチの下記の言葉から「ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるような」場を構想している：

人類は、地球に住むことの責任／応答力、そして種を破滅に導くような生産物に対して、絶対に侵犯してはならぬ境界を定めるという責任／応答力を引き受けねばならない。人間の文化は、存在しているものは何であれ、ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリーを、今一度確保すべきである。どのような人間社会も、そのような領域をそれぞれ独自の仕方でも認めてきた。今や、自らを創造する力と破壊する力をも獲得した社会は、そのようなテリトリーを自ら定義し直さなければならない。惑星地球における生は、もはや神の秩序によって保証されていない。今やそれは、私たちすべての脆く心許ない手に委ねられているのだ (Melucci (1996=2008), 176-177 ページ)。

基調報告においては、まず、このような「共創・共成コミュニティ」の“背景 (roots and routes)”であるところの、ブラジル、イタリアから日本への流れについて簡単に紹介した²⁴⁾。つづいて、なぜいまこの試みがとりわけ求められているのかについては、直近の事例に基づき²⁵⁾、〈見捨てられ、廃棄されてしまった人間、グローバル社会の「部品」となってしまった人間の気持ちはどこに行き着くのか？ 子どもたちは、その生命とともに、何を奪い取られたのか？〉と「問いかけ」、以下のことを報告した：

- ①メルッチの言葉にもあるように、「笑うこと」「泣くこと」「無償性／無条件性 (gratuitousness) と遊び」「不思議なものに驚くこと」「無心の関係性」の“境界領域”を自由に旅することが、「私たち誰もが備えもつ子どもらしさの要素」である。子どもたちは、困窮のどん底にあるときでも、「遊び」の要素を探し出す。いま手にしている「好位置」を易々と手放し、いくつもの異境を旅する。異境で生き抜く力、いくつもの異境を旅する力——異なる境界線の引き方、補助線の引き方を提示することで“メタモルフォーゼ (変身・変異)”を誘発する。つまるところ、子どもたちは、“臨場・臨床の智”を宿して、

24) ここで紹介した A. トゥレーヌの「社会学的介入」を批判的に継承したメルッチの「療法的でリフレクシヴな調査研究」、W. F. ホワイトの「社会的発明」、ブラジルの「農村家族学校 (scuola famiglia rurale)」と O. イアンニの「社会の医者」の社会学を継承したメルレルの「地域研究所 (FOIST)」と「社会のオペレーター」については、新原 (2019) の第5節「コミュニティでのフィールドワーク／デイリーワーク」、22-30 ページを参照されたい。

25) 報告では、惑星社会の問題が、きわめて個的で奥深い場所 (その意味では、他者による理解の“端／果て (punta estrema/finis mundi, terra of the end of world)”) で生起していることを確認するため、以下のような具体的な事例をもとに「問いかけ」を試みた (事例は、2018年3月、5月、6月の朝日新聞の紙面より紹介した)：

◇「もうパパとママにいわれなくてもしっかりとじぶんからきょうよりもっともっとあしたはできるようにするから もうおねがい ゆるして ゆるしてください おねがいしますほんとうにもうおなじことはしません ゆるして きのうぜんぜんできてなかったこと これまでまいにちやってきたことをなおります これまでどれだけあほみたいにあそんでいたか あそぶってあほみたいなことやめるので もうぜったいぜったいやらないからね ぜったいぜったいやくそくします」(2018年3月、「しつけのつもり」と語る父親、「自分の立場」を考え「見過ごしていた」母親の虐待により死亡した船戸結愛 (ゆあ) さん (5歳) の言葉より)。

◇「自分は価値のない人間だ。自由に生きたい。俺は自由人に支配されたくないから旅に出る」と言って家を出た小島一朗青年 (22歳) が、2018年6月9日夜、新横浜～小田原間を走る新幹線内で、刃物により三人を殺傷した。青年は、「発達障害、育児放棄、不登校、施設、定時制高校、無職、精神疾患」などの言葉で規定された。日記の「ぬむいのにぬむれない くつうでくるしいこれはいたみよってのみごまかすことのできるものだ」といった言葉まで報道された。

◇『『相手のQBを1プレー目で潰せば (試合に) 出してやる』と伝えられたと学生は言いましたが、『潰せ』は、『けがをさせろ』という意味ではなく、本学フットボール部においては、試合前によく使う言葉で『最初のプレーから思い切って当たれ』という意味です。』(2018年5月、日本大学・アメリカン・フットボール部のコーチの証言より)。

事例で取り上げた彼女／彼らもきっとその一人であるはずだった。

- ②しかしながら、「跛行」「蛇行」「小休止」「停滞」「滞留」「沈滞」「隙間」「合間」「遊び」の要素は、親密圏においても根絶・排除され、個々人の内なる“痛み／傷み／悼み”は、マグマの「澱み」となって沈殿し、ある日突然、その溶岩流が噴出し、惨事を引き起こす。システムへの過剰な適応に、生体は悲鳴をあげる。伏流し、堆積し、時として爆発する“不協の悲鳴 (le grida disfoniche)”——同時多発的に継続的に、表面上の「調和」「安定」を揺りうごかす叫び声——を感知し、その意味をとらえることが必要である。
- ③いまますべきことは、「跛行」「蛇行」「小休止」「停滞」「滞留」「沈滞」「隙間」「合間」「遊び」を受容し、「存在しているものは何であれ、ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリー」を幾重にも組み込んだ“共創・共成コミュニティ (co-creating/co-becoming community)”を“ともに (共に／伴って／友として) 創ることを始める”こと、なけなしの智恵と体力を寄せ集めるとい骨折りをすることである。

4. 聴衆からの反応

本節では、シンポジウム当日に生起した“関係性が切り結び直される瞬間”に着目する。

上記のような基調報告の後に休憩時間となり、会場から質問紙が寄せられ、休憩時間には多くの直接的なやりとりがなされた。さらにシンポジウム終了後のアンケートにも、多くの意見が寄せられた（質問紙は9件、口頭でのやりとりは7件、アンケートからの意見は29件あった）。

以下では、2月2日のシンポジウム当日の報告・議論において、「プロジェクト」関係者以外の聴衆から質問紙のかたちで寄せられた見解、休憩時間・終了後などになされた口頭での質疑応答、参加者アンケートに寄せられた質問・意見に基づき、論点を整理する。基調報告の後に、紙面のかたちで寄せられた質問については「Q」で表示し、シンポジウム終了後のアンケートで寄せられた意見や口頭での質問・コメントについては「◇」で表示する。記述の方法としては、個人が特定されないかたちで、意見の論点を抽出するかたちをとる（論旨が近い意見については統合して記述するというかたちを採用している）²⁶⁾。

26) 第4節の聴衆の意見と第5節の学生のリフレクションの整理にあたっては、現代アメリカの私的・公共的性格をめぐる中産階級の言語と道徳的推論に関心をもった R. ベラーたちの調査研究グループによる、「共通の関心をめぐる同胞市民との対話ないしは会話」「能動的なソクラテス的なインタビュー」の成果である『心の習慣』の付論「公共哲学としての社会科学」の手法を参考にしている。Robert N. Bellah et al., *Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life*, The University of California, 1985 = 島蘭進・中村圭志訳『心の習慣—アメリカ個人主義のゆくえ』みすず書房, 1991年, 357-369ページ。

4-1. 「子育て」論の背後にある現代社会認識

4-1-1. マクロな現代社会認識とかわる疑問：

Q. 流動性の低い社会において同じ地域内で協力せざるを得なかったという状況から、ひとや資本・情報の流動性が高まり、他者との「つながり」を選択する社会へと変化するなかで、何がひとを結びつけるのか。

Q. 地域社会にはいかなる意味があるのか。インターネット等を介しての仮想空間の「コミュニティ」ではなく、生身で対面する直接的なコミュニケーションが意味を持つ理由は何か。

◇災害や虐待、地域とかわりを持ってない、「(地域や学校に)なじめない」子どもたちを誰がどう支援するのか。そこでの地域はいかなる意味を持つのか。

ここで提出された質問の背後にあると考えられたのは、地域社会、国民社会、学校教育といった枠組みを前提として、社会的関係性（とりわけ、市場を典型とする結びつきとは異なる協業の関係性）を考えることが難しくなっているという現代社会認識である。この認識と相関するかたちで、〈関係性を取捨選択し情報社会を自由自在に移動する〉という在り方への「適応」から取り残される「子どもたち」が抱える困難へのまなざしである。

この困難に対して、立川団地においては、出ていきたいと思っても、なんとか住み続けなければならない人が多く、ひとりひとりへのていねいな対応や、複雑な調整をやり続けている。外から見て「成功例」とされている立川団地のなかにひとたび入り込んで見るなら、自治会費から支給される弁当を食べるために行事に参加するというひと、行事の手伝いに自分の居場所を見出すひと、そこでの「つながり」方は千差万別であり、そこには取捨選択がある。

しかしながらここには、行事や作業をともにするなかで、対面しつつ、「つながり」方の異質性を許容しつつ、お互いに相手をよく見て理解し、「関係性が切り結び直される瞬間」が「設計」されている。「コミュニティをともに創る」という営みに、「選択」をこえ、「巻き込まれ」「引き込まれる」なかで結び直された、生身の特定の二者の関係（「○○さんがやるなら、わたしもやらないといけなかな」といった結び目）が「多重／多層／多面」的に作られ続けている。この「不協の多声（polifonia disfonica）」、一様な「適応」とは異なる多様な「声」を認めるかどうか、生身で対面するコミュニティが意味を持つ条件のひとつとなっている²⁷⁾。

27) 他方で、外部からやって来て、「生活困難児童に対する学習支援や子ども食堂」といった「目標」を掲げたグループは、「ここでは成果があがらない」と判断し、早期に撤退した。この点については、稿をあらためて執筆する必要があるが、新原（2016a）で詳述した「湘南プロジェクト」においても、「明確な目標」と「問題解決」の方向性を設定した「プロフェッショナル」な「ボランティア」が撤退した後に、在住外国人の親たち、子どもたちのより「コミュニティをともに創り／成り続ける

「人間の里山・里海」²⁸⁾のような関係性は、支援の即効性を持たないとしても、支援の対象とされる「(困難を抱えた)子どもたち」「高齢者」「障がい者」「外国人」などを、生身の直接的なコミュニケーションの「網の目」のなかで慰撫される可能性を持つという共通感覚が、とりわけ団地のひとたちのなかにはあった。

(co-creating community/co-becoming communally)”試みが生み出されていった。湘南団地で生起された“関係性が切り結び直される瞬間”については、中里佳苗「生きた『吹き溜まり』—『湘南団地日本語教室』の創造まで」新原 (2016a), 237-317 ページと、中里佳苗「吹き溜まりの不定根—『その後』の湘南プロジェクト」新原 (2019), 381-434 ページなどを参照されたい。

28) 「3.11 以降」は、以下のようなメッセージを学生たちに対して送り続けたが、これも期せずして、立川団地の「網の目」の組成との共通性を内包していた：

人間の里山・里海へ：「願望と企図の力 (ideabilità e progettualità)」は、膨大に蓄積されたが捨て置かれてしまった記録や記憶のなかから、粘り強く丹念に、渉猟し、徹底して探しまわり、踏破し、「生存の場としての未発のコミュニティ」の萌芽を掘り起こし、すくいとるための補助線です。この力は、イタリアの知識人—グラムシ、そしてバザーリアやランゲルが持っていた「謙虚と確信 (umiltà e convinzione)」の力でもあります。当面の戦いに勝利する (vincere) 力ではないかもしれませんが、ともに (cum) 困難を乗り越える (superare) 力、納得し確信し自らの過ちを悟る (convincersi) 力であり、その道程 (percorso, passaggio) への誠実さ (fedeltà)こそが人間の道 (真理) であるというかまね・流儀、すなわち道を信ずる力でもあります (「誠者天之道也、誠之者人之道也 (誠は天の道なり、これを誠にするは人の道なり)」『中庸』/「朝に道を聞かば、夕に死すとも可成り」『論語』)。

放射能を含んだ水は、地球上を循環し、私たちの身体に蓄積され、とりわけ生まれ来る子どもたちに影響を与え続けます。これまでも、人間が生み出した多くの有害物質を、森や海は、やわらかく受けとめ、やわらげてくれました。私たちは、この物質や生命の関係性の「網の目 (web)」のなかで、その「間 (liminality, betwixst and between)」で、生存を確保してきました。森や土が生きていれば、汚染された物質を浄化し、地下水流を生み出してくれます。膨大な時間をかけて創られてきた「網の目」の構造とその意味を理解することです。

人間の社会もまた、「網の目」が生きていれば、不条理な苦痛をやわらげてくれます。各世代のつなぎ役が、「(我が)身を投ずる」(上野英信) 試みをし続けてきたのは、一個人では応答しきることは出来ない困難と痛苦をやわらげることを可能とする「網の目」の構築でした。汚染水が流れ続けるという「統治性の限界 (the Limits of Governmentality)」のなかで、それでも人間に出来ることは、「水を浄化してくれる里山・里海」のような人間の「網の目」を創ろうとし続けることです。

「湘南プロジェクト」と「聴け!プロジェクト」、そしてこれから新たに始める「立川プロジェクト」は、自分と他者の「間」に、「網の目」を創るための試みでした。そのすべてがうまくいかなかったとしても、この方向性は、これからの惑星社会を生きていくときに決してまちがっていないはずだと思っています。よりゆっくりと、やわらかく、深く、耳をすましてきき、勇気をもって、たすけあうことに費やした時間とエネルギー、ひととひとの「間」に創られた「網の目」だけが、後に遺され、託されていきます。これは、システム化された社会のなかで既定された範囲の消費や搾取・蕩尽の「端末」でなく、一個人では応答しきることは出来ない困難と痛苦をやわらげることを可能とする「網の目」を構築する「メディア・媒介項 (medium, mezzo)」, 時代と世代の「つなぎ役 (riempitivo, fill-in)」となろうとしたひとたちの軌跡を、私たちがまた辿るということです。到達点でありこれからの起点となるもの、いま身体にのこっている“身実 (みずから身体をはって証立てる真実)”は、人間の里山・里海を創るという方向性です。新原 (2019), 38-39 ページ。

4-1-2. ミクロな場面での対処の在り方：

- Q. 都市部においては、多世代がかかわる子育てが難しいのではないか。
- Q. 女性が一人で家事も育児も仕事もしなければいけないという状況でどんな支援があるのか。
- Q. 青年層や子どもたちの減少のなかで、若者にどう働きかけるのか。
- Q. 親の言葉遣い、態度、マナー、親育てをどのようにするのか。

これらの質問では、グローバル社会の問題が、きわめて個的で内面的に立ち現れる“社会的痛苦 (patientiae, sufferentiae, doloris ex societas)”への応答の在り方、とりわけ親密圏の関係性が問われている。

ここでは、「区分」や「管轄」を“ぶれてはみ出す (deviando, abweichend)”要素や瞬間が重要となってくる。立川団地における協業の在り方が、他の地域と比較して持続可能性を保ってきた理由のひとつとして、「知ってしまった、見てしまった、聴いてしまった」から逃れられないひとたちの存在があげられる。他者の「叫び」に引き込まれ、巻き込まれ、自分の「選択」や「判断」から“ぶれてはみ出して (deviando, abweichend)”しまう。きわめて特徴的なのは、以前の住民のなかに、引っ越した後も、団地の行事の運営にかかわり続けるひとたちが存在していることである。それゆえ、団地のコミュニティは、「団地」という「区分」や「管轄」だけで完結せず、「出会い」や「奇遇」「機縁」によって、「なぜか出来てしまった」“多重／多層／多面”の「人間の里山・里海」によって構成されている。

こうして見てくると、「即効性」にはつながらないように見える「人間の里山・里海」を成り立たせている要素である“ぶれてはみ出す”力(“領域横断力／突破力 (Einbruchskraft)”)が、子どもをめぐる焦眉の問題に対して、「区分」や「管轄」の壁を突破する役割を果たしてもいることが見てとれる。「自分の子ども」ではなくとも、問題があると思われる親、言葉の届かぬ親に対しても声を発する。そうすることで、子どもたちに、親とは異なる「大人」のモデルがあることを実感してもらう。地域の子どもの地域が育てるだけでなく、よその地域で働き暮らすひとたちも育てることで、「地域の子ども」は「社会の子ども」として開かれていく。

4-2. 調査方法論／関係性／組織論・運動論をめぐって

4-2-1. 「距離」と関係性のジレンマと調査研究の方法：

- Q. 「何かをしてあげたい」がだめとなると何もできないのではないか。何かよい対し方はないのか。
- Q. 参与観察にとどまらない“臨場・臨床的な在り方”とはいかなるものか。

これらの質問からは、「上／外」からの（問題を抱えた相手への）「支援」「介入」でも、「成功例」の「適用」でもない在り方——ここでは、「水平的な関係性」による〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉という在り方の内実とその条件が問われている。何かの「支援」「介入」をするときには、「（目的を限定した）当初のプロジェクト」が在ることを前提としている。しかしながら、非対称性や不均衡を抱えながらの協業の試みを実際にやってみると、異質な要素や予想外の出来事に対面せざるを得ない。メルッチはこの点について以下のように述べている：

経験的調査を体験したものなら誰しも、調査のなかで調査のプロセスそのものも変わっていくこと、実際に行われたことは、始まった当初のプロジェクトから異なることを知っている。調査者も当事者も、自らの境界を揺り動かし、パートナーの動きと変化する周囲の環境に応じて動く。たしかに社会調査は、通常のところ、論理的かつ線形的に仮説を検証し、秩序ある一貫性のもとにデータ収集と解析が行われるものとなっている。しかし実際には、調査における仮説も調査方法もデータ収集のための特別な技法も、当事者との間に起こる予想外の出来事や困難のなかでの関係性の修正に拘束されてもいる²⁹⁾。

むしろ、「関係性の修正」の創意工夫のプロセスこそが〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉のリアリティであり、その「予想外の出来事や困難」への応答のプロセスそのものも含み混んだりフレクションが必要となる。いま私たちが生きている知識社会では、フィールドのひとつもすでに「理論の適応」によって足元の現実を理解している場合が多い。そこでは、非対称性をもった異質な複数のアクターの相互作用によって、予想外の展開が常に起こるため、「支援」「介入」の「プロジェクト」は、「論理的かつ線形的に」は展開されていない。それゆえ、何が「よい対し方」なのかについてはひとまず判断を停止して、非対称性のある関係から何かを始めてみる。“臨場・臨床”の場では、最初の関係性がこわれることを予見し、関係性の切り結びをしていくしかない。

“臨場・臨床的な在り方 (ways of being involved in the crude reality)”とは、「近くにいても遠い」とは逆で、物理的に「遠く」にいても「はるかな近さ」を持つ在り方である。その関係性には常に流動的な「遊び (プレ, ユレ)」があり、“関係性が切り結び直される瞬間”に直面し続けることになる。その“道行き・道程 (passaggio)”は、先行きの見えない、所在なさともなうものであるが、“根本的瞬間 (Grundmoment)”に“居合わせる (Being there by accident at the nascent moments in which critical events take place)”機会を与えてもくれる。

これは実際に立川団地と湘南団地で起こったことであるが、TV局の取材等の局面で、撮影

29) Melucci (2000=2014), 100 ページ。

隊から「フィールドのひとたち」として「ひとづくり」にされるかたちで、到来を待ち構え、調査研究者／当事者が、映像の背後や“端／果て”で起こっていることをいっしょに理解し記憶を共有した。すなわち、この“在り方 (ways of being)”は、可視的に記録される「現実」を、いわば「水面下」から、“深層／深淵”から“生身の現実 (cruda realtà, crude reality)”を凝視する機会を与えてくれるのである³⁰⁾。

4-2-2. 形骸化の抑止と“メタモルフォーゼ”：

Q. いままでやってきたことをいかに手放し、革新していくのか。

Q. これから子どもを育てる学生の教育をどうするのか。

通常の調査研究においては、既存の理論と方法により、特定のフィールドに〈テーマとリサーチ・クエスチョン〉、調査研究の範囲、時間を限定して「入り」、大学に「もどった」後に、その成果をとりまとめる。これに対して、立川団地で試みられた方法（という以上に“在り方 (ways of being)”は、“うごきの場 (field of nascent moments, campo di momenti nascenti)”に“居合わせる (being involved with the field and being there by accident at the nascent moments in which critical events take place)”というものだった。

最初は、「被災者」に着目してフィールドに入ったが、団地の自治の“舞台裏 (retroscena)”にも居合わせ、そこでの声を聴き、言葉の真意をつかもうとするなかで、調査研究のテーマ・範囲・方法それ自体も“かたちを変えつつうごいていく (changing form)”ことを体感し、悩みつつ受けとめた。

前川財団との関係においても、立川団地との関係と同じく、“うごきの場に居合わせる”という在り方 (ways of being)——相手側の文脈やリズムを理解し、協業可能なかたちを探ることで、自分たちの枠組みを変えていくことを試みた。したがって、本シンポジウムは、「子育て」「まちづくり」「高齢者支援」など、なにかのトピックが優位性をもつというアプローチではなく、〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想していく大きな流れのなかで、子どもたち「も」よく生きられる“場の共創・共成”を考えるという射程を持っていた。この射程は、前川財団との“出会い”によって、自分たちの立ち位置から“ぶれてはみ出し”、“かたちを変えつつうごいていく”ことで得られたものである。

この“メタモルフォーゼ (変異 = change form / metamorfosi)”のプロセスは、調査研究者の

30) このように“臨場・臨床的な在り方”の具体例とその方法の意味については、『うごきの場に居合わせる』で詳細に論じた。とりわけ、中村寛の「エピローグ」(新原 (2016a), 457-466 ページ)と野宮大志郎の「むすびにかえて」(新原 (2016a), 467-483 ページ)を参照されたい。

側のみならず、深くかかわりをもつことになるフィールドの当事者の側にも起こっていくものであり、お互いに変化していくなかで、「空中分解」してしまわないための“基点／起点”となるべきものを必要としていた。

立川団地でのプロジェクトにおいて、“基点／起点”となったのは、地域と大学の双方で、異質性を含み混んだ“共創・共成コミュニティ（co-creating/co-becoming community）”を、それぞれの仕方で構想していたことである（奇しくもそれぞれが「社会的発明」という同じ言葉を選んでいった）。

その後、お互いの距離・関係性をはかりながら、協業可能なかたちを探りつつ、“コミュニティをともに創り／成り続ける（co-creating community/co-becoming communally）”なかで、“共創・共成プロジェクト（project oneself into co-creating community/co-becoming communally）”へと向かっていった。

この“乱反射する生身のリフレクション”の関係性が、“関係性が切り結び直される瞬間”を継続させ、“切り結び続ける”ことで、組織・集団の形骸化や、子どもたちへの外在的に馴致する可能性の縮減につながっていたと考えられる。

これはまた、フィールドワークにおいて、On と Off をつくらない、“不断／普段の営み（movimenti continui e quotidiani）”、デイリーワークであり、“フィールドのなかで書く（writing in the field, writing while committed）”、“複数の目でみて複数の声を聴き、複数のやり方で書き／描き遺していく”、うごきのなか、余裕のないなかで自らふりかえり続ける、その営みを特定の他者との間で“交感／交換／交歓”し続ける、という試みであった。

この“臨場・臨床的な在り方（ways of being involved in the crude reality）”による実践は、きわめて「感性的人間的営み（sinnlich menschliche Tätigkeit）」であり、「自治会役員／住民」、「立川プロジェクトの常時参加者／行事などへの一時的参加者／他の学生」といった区分が衝突・混交・混成し、流動化し、重合し、地域と大学を編み合わせたひとつの「立川団地プロジェクト」という関係性へと“かたちを変えつつうごいていく（changing form）”ものであった。

それゆえ、「未来教育シンポジウム」は、すでに生起しつつあるこの「立川団地プロジェクト」というチームプレーの意味を、（はじめて）「ひとつのチーム」として、参加者それぞれが／みんなでもふりかえり、他者の前で「お披露目／お裾分け」する機会として、各自は、感じ取っていた。

この意味では、ていねいに創りあげてきた工夫と智恵を、それでも「手放し」続けること、予想外の“（軸足をずらし）揺れうごきつつかたちを変えていく（playing and changing form）”うごきに、自分をなじませていくことが、最初から組み込まれていた。

幸いにして、シンポジウム終了後のアンケートに寄せられた感想からは、この場で「開示」「体現・再現」しようとしていたものへの深い理解と応答を受け取ることが出来た：

- ◇子どもたちが自分で道を切り開いたと思えるように下支えをすること、異なるひとたちがそれぞれの目的を尊重しつつ協業することに意味がある。
- ◇一定の組織（自治会、ゼミ）はありながらも、メンバーが入れ替わり、方法が変わり、時代に応答するなかで変化していく。場のうごきのなかに「子ども」の存在を入れ込み、その子どもがまた別の場でコミュニティをつくっていく。一人だけがしあわせになることがない社会。異なる特性をもった仲間という理解を可能とする社会へとつながっていく。

これから子どもを育てる学生の教育をどうするのかという質問とのかかわりでは、「なぜ学生に、プロジェクトの意味についてひととおり教えてからフィールドに入るというかたちをとらないのか」という質問もいただいた。この質問に対しては、以下のようにお答えした：

「理論の適応」でも「現場からのたたき上げ（と言いつつ、非意識的な先入見に縛られ他者を誘導してしまう）」でもなく、理論と実践の“対話的なエラボレイション”のプロセスを学生に体験してもらうためです。一律に、定式化された理論・方法を説明し、やってもらうという順番ではなく、学生たちが身体をうごかしているなかで何かに気付きかけた瞬間をとらえて、ひとりひとりにちがうタイミングで背中の方から一声かけるようにしています。職人の智の“伝承・伝達 (trasmissione)”の方法です。手間はかかりますが、“根本的瞬間 (Grundmoment)”をとらえることで、結果として深い理解に到達していきます。

次節で述べるように、たしかにこの“自ら学ぶ／骨身にしみる／身体でわかる (autoistruirsi nel corpo)”という在り方は、なかなか「在り難い」(たいへんすぎて、効率が悪く、費用対効果が低い)ものであることを学生は実感し、葛藤を抱えてもいた。学生が「適応」せざるを得ないものと直感してきた思考態度 (mind-set)——動植物を飼育・栽培・繁殖させるように、「教育・成長 (development)」の道筋を線形で表し各段階への到達の速度を測定するという在り方への違和感と、そこから“ぶれてはみ出す”ことの不安をめぐる葛藤である。

5. 学生の葛藤と後からやって来る理解

本節では、学生と団地住民個々人のレベルおよび「網の目 (ネットワーク)」のレベルで生じた“関係性が切り結び直される瞬間”と〈そこにいなくなった後の“場のうごき”に想いを馳せる (caring)〉という“創起するうごき (movimenti emergenti)”に着目する。

以下では、2月2日のシンポジウムに参加した30名ほどの学生・院生・卒業生たちによるリフレクションからの論点整理を行う。大学からの参加者である立川プロジェクトのメンバー

は、“複数の目で見て複数の声を聴き、複数のやり方で書き／描き遺していく”ことを身体化しており、参加者のほとんどが、当日の記録・印象記を作成し、ゼミ全体のメーリングリスト（卒業生も含めて300名程度が常時閲覧している）において共有している。参加者がメーリングリストに投稿したりフレクシオンから引用した言葉については、「 」で示している。

5-1. 学生の葛藤——「素早く切り捨てる／ゆっくり、しっかり生きる」

当日のパネルディスカッションのなかで、H会長からは、「中大生とは言葉で言い表せない心のつながりがある」という言葉が、そして事務局のSさんからは、「中大生は行事の『裏側』、普段の自治会も見てくれた」という言葉が発せられた。しかしながら、この一体感を持った関係性は、「立川団地を知らない人、中大生を知らない人たちには、どのように映っていたのだろうか（内輪話だと思われたのではないか）」という「心配」が、学生たち側から提出された。

学生たちは、“（智へのパトスを）寄せ集めるとい骨折り（spezzare le ossa per essere eterogeneo）”の体験が持つ濃密さや意義を意識しつつも³¹⁾、「（そういうのもいいんだけど）そんなこと簡単にはできないでしょ」という「外からの声」を「心配」してもいる。自分たちのやっていることが、「『実用性・効率性』を求める社会から見れば、遠回りで、コスパ（cost performance）が悪く、意義があるのかないのか分からないと見られているのではないか」という不安である。とりわけ、立川団地やゼミの場で試みられている関係性の構築と、「落差」を感じる瞬間が、就職活動や就職後の就業体験のなかで生じる。すなわち、「素早く、いろんなものを切り捨てる」「その場をやり過ごす」在り方と「ゆっくり、すべてをすくい取る」ような在り方の間で生じる「葛藤（ジレンマ）」である³²⁾。

31) 新原が担当する各ゼミには、「(1) 地域社会／コミュニティの“未来”にきちんとかかわる。(2) 特定のフィールドと長くつきあっていく。(3) 様々なひととの間で場をつくる「汗かき仕事」に骨身を惜しまない。(4) 教えられたり、指示されたりする前にまず自分で始めてみる。(5) 自分がいまだ体験していないことだとしても興味関心を持つとしつづける。(6) いまの自分の“限界を識る”ことを恐れずに、こうしたことにチャレンジする」という条件に呼応した学生が参集している。「立川プロジェクト」は、そのなかから、さらに“コミュニティをともに創り／成り続ける”ことに関心を持つ学生が集まってきていた。

32) “臨場・臨床的な在り方”に引き込まれる面があるのと同時に、その営みは「外部世界」との断裂とつながるのではという葛藤を内面に抱えることになる。この「葛藤」および「居心地悪」さについては、鈴木鉄忠『『教師』のいない『教室』—『治安強化』のなかで苦闘し葛藤する学生ボランティア』新原道信編『うごきの場に居合わせる—公営団地におけるリフレクシヴな調査研究』中央大学出版部、2016年、367-368ページ、および、阪口（2019）、260-263ページで分析がなされている。メルッチは、学生たちが社会から迫られていると感じるところの「高度に複雑／複合的な惑星システムの端末」となった都市に生きる個人々が直面する「選択のパラドクス」について以下のように述べている：

選択は、私たちの時代の不可避の運命である。どこに物理的に居を構えていようとも、私たちはいつも同時に、ニューヨークの住人であり、パリの住人、あるいはロンドン、サンフランシスコ、

「その場をやり過ごす」在り方は、「自分の中にすっかり染み付いている」ものであるが、他方で、「ゆっくり、しっかり生きる」という在り方をしても、あるいは出来ないとしても、「切り捨てられない・安心して居られる場所」を希求してもいる。「寄せて集まる場、異質なものをいっても良いと思える場」として、立川団地とゼミは機能していて、その体験を通じて「水平的な関係性」や「異質な要素や予想外のことを『喜ぶ』という“かまえ”をもったコミュニティ」の意味を体感している。すなわち、立川団地とゼミは、〈合わせ鏡〉のように「異質な人がいてもいい」という共通感覚のもとに成り立っているコミュニティであり、「一人一人が感情（喜怒哀楽）を大切に活躍をしている」という特徴があり、「偏差値で人をはからず、序列に囚われない社会。変な人でもいてよい。“よい子が住むよい街に住めない人”たちが“いるだけでいい”と言われる場所」である。

そう体感するが故に、いずれは、この場を出て、自分もまた「素早く、いろいろなものを切り捨てる」、あるいは「廃棄」されるのではないかという恐れを持ちつつも、“たったひとりで異郷／異教／異境の地に降り立つ”準備をすすめていくことになる。この「プロジェクト」の卒業生にとっては、シンポジウムが、ふたつの時間の流れ（「社会的時間」と「内的時間」³³⁾）の

東京といった、現実のあるいは想像上の大都市の住人である。大都市は、相互に依存しあう高度に複雑／複合的な惑星システム (highly complex planetary system) の端末である。私たちはコスモポリタン文化へ象徴的に包摂されざるを得ない。コスモポリタン文化は、私たちが体験できる世界を拡張し、多重／多層／多面化する一方、同時に複雑性 (complexity) を突きつけ、選択を迫る。複雑性とは、分化／差異化、高速性、頻発する変化、そして行為機会の拡大を意味する。Melucci (1996=2008), 62 ページ。

「選択のパラドクス」については、新原道信「A. メルッチの“未発の社会運動”論をめぐって—3.11 以降の惑星社会の諸問題への社会学的探求 (3)」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学 26 号 (通巻 263 号), 2016 年で論じている。以下、新原 (2016b)。

- 33) メルッチは、『プレイング・セルフ』第一章「日常の挑戦」において、「諸関係の微細な網の目」に分け入り、「時間のメタファー」「測定することと近くすること」「体験のなかの時間」「時間と空間を構築する」「内なるリズム、社会のリズム、宇宙のリズム」という項目を立て、「内的時間」「身体に宿る時間」の「“多重／多層／多面” 的で不連続」な「プロセス」への理解を含み混んだ社会理論を企図した。Melucci (1996=2008), 10-11, 27-34 ページ。cf. 新原道信「『グローバリゼーション／ポスト・モダン』と『プレイング・セルフ』を読む—A. メルッチが遺したものを再考するために」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学第 18 号 (通巻 223 号), 2008 年; 新原道信「A. メルッチの『時間のメタファー』と深層のヨーロッパ—『フィールドワーク／デイリーワーク』による“社会学的探求”のために」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学 21 号 (通巻 238 号), 2011 年。

葛藤する学生たちには、このメルッチの議論を紹介しつつ、下記の呼びかけを行ってきた：

とりわけ卒業生を見送る立場のゼミ生のみなさんにお伝えしたいことがあります。社会のなかでの自分のセーフティドライブについてです。就職活動など、将来にむけての不安や期待を抱えつつ、大学の外に出て、様々な体験をしつつあると思います。みなさんが直面しているのは、メルッチの言葉で言えば、内的時間と社会的時間の間の自らの内なる葛藤ということになります。社会的時間はいろいろなものを切り離し分節化する均質で線形の時間ですが、内的時間は時に速く時にゆっくり、不連続で“多重／多層／多面”的な時間でもあります。私たちは、どちらの時間

バランスをとりつつ生きるという playing で challenging な「感性的人間的営み (sinnlich menschliche Tätigkeit)」の意味をふりかえるための“基点／起点 (anchor points)”，卒業生にとっての「里帰り／見直し」の場としても理解されていた。

しかし、その場所は、“生身のコミュニティ (living community)”として活性化したり、病んだり、様々な局面や症状を持つ「生き物」であり、シンポジウムの場においても、「剥製」ではなく「生物 (なまもの)」のままに立ち現れていたと学生たちは感じていた。すなわち、「共創・共成コミュニティ」「について」語るだけでなく、“コミュニティをともに創り／成り続ける”ことを、その場で体現するという観点では、シンポジウムの場自体が「登壇者だけでなく会場全体で行うようなディスカッション」となっており、「登壇者の『対話』のみならず会場との『対話』が起きていた。行事の後の反省会や忘年会で見られるやり取りと変わらず、団地と中大生の間に『関係がある』から生まれている対話のように感じた」、つまりは観察が自らへも照射され、自らの「見直し」を余儀なくさせられもしたのである。

5-2. 後からやって来る理解——葛藤のなか、そこでの「居心地悪さ」を生きていく

「(学生たちには、いろいろやってもらってありがたいけれど) 本当に学びになっているのだろうか」という想いを持ち、また言葉にもしてきた立川団地住民、とりわけ自治会役員は、シンポジウムの場で、団地の行事とかかわってくれた「立川プロジェクト」の学生に対して、「就職して、結婚して、家を買うくらいになったら自治会活動をしていたことを思い出してほしい」、「家庭を持った時にここで身につけたことを発揮してほしい」という言葉を新たに発した³⁴⁾。

学生たちは、この「学校から、また立川団地からもいなくなった後のことを気にかける言葉」から、いまここにいないひと、自分がそこにはいなくなった場への気遣い (caring) を受けと

も同時に生きていて、時に内と外で引き裂かれるような感覚を持ちますが、実はそれ自体がきわめて内的で必然的な出来事です。外的には、社会的時間が支配的に見えるような場においても、常にそれとはことなるものが「伏流」しています。ですから、どのような場所でも、最初は「能面」のように見える相手だったとしても、他者と出会える瞬間はあるはずですが、ゼミの卒業生たちは、たしかに、“ともに (共に／伴って／友として)”創ってきた“場”から、“たったひとりで異郷／異教／異境の地に降り立つ”ことになりますが、意外に“出会い”を体験したりもしています。利己か利他か、速くか／ゆっくりかという「対立」ではない“生身の現実”のなかで、ほとんどのひとが悩み、葛藤しています。その悩み・葛藤はとても自然であり、ひとつの大切な、人間としての成長 (becoming) の時間でもあります。内的時間と社会的時間の「安全運転」を練習しているのだと思ってください。

34) プロジェクトにかかわり卒業していった学生のなかには、故郷福島の被災者への想いから、原発以前の「開発」であった炭鉱からの離職者へのインタビュー調査により卒論を書き、新聞記者となった学生や、立川も含めた多摩地域の産業廃棄物処理場となっている町の研究をした後に地元の市役所に勤めた学生などがいた。自治会役員の協力で立川団地に暮らす「被災者」の方たちからのインタビュー調査により卒論を書き、県庁職員となった学生は、「プロジェクト卒業生」として、シンポジウム会場にやって来てくれていた。

めた。そしてこのシンポジウムの後に、「(団地の方たちが) 大学生の卒業後を見てくれているように、この先の団地の自治会運営の在り方にどのような影響をもたらすのか考えながらともに在り続けることが課題である」、あるいは、「立川団地に何を返すことができるのか、合わせ鏡のように、お互いの先にあるものを考えられるような場を作り続けていきたい」と言うもの、これからの人生のなかでの何らかの「お返し」を考えるものがいた。そこにいなくなった後の“場のうごき”に想いを馳せる瞬間 (nascent moments of caring) であった。

ここでの〈合わせ鏡〉という理解を支えていたのは、非対称性をもつ、ふたつの“無償性／無条件性／惜しみなさ (gratuitousness, gratuità)”であった。登壇者のH会長やSさん、シンポジウムに参集してくれた住民の方たちには、「辞めるに辞められず今まできた」、初めから「好き」で始めたわけではなく、「巻き込まれて」参加していたら気付いた時には随分長く続けていた。あとから振り返って「好きなのかなあ」という感触があった。学生たちのなかにも、「よく分からないけれど、なんか面白そうだからやる」「それがたまたま生かされた(偶然得した!)」という感触、「一見役立つかわからない事柄にも躊躇せずに接してみて、そこから何とか学びを見出し、ひとつでも今後役に立てる」という感触があった。

そしてこの対極に在る「コストパフォーマンス(費用対効果)」の考え方——『「たまたま」じゃ可能性が低すぎるので、やったことは全部生かされないと困る。説得力がない』——の影響力を意識してもいた。

それゆえ、「他の所とは異なる関係で居られるのは、その場限りの関係ではなく、社会や団地の変化に合わせて、緊張感を持って出会い続けることに取り組んでいるからなのかもしれない」という気付きは、「安住」とは異なる在り方 (ways of being) へとつながらざるを得なかった。

すなわち、地域においても大学においても、強い影響力を行使している社会的時間と、自らの内的時間との間で、個々人は、大学にいても、地域とかかわっても、社会に出ても、葛藤を抱え続ける。ゼミ活動や立川団地とのかかわりは、葛藤の「解決」をもたらしてくれるわけではない。むしろ葛藤し続けるしかないという“生身の現実”が突きつけられ、それは将来への「不吉な予感」でもある。他方で、この葛藤との対面は、遮蔽しようと思えば出来ないことはないと思われることがら、“識る”ことの恐れを抱くことがらをあえて境界をこえて選び取ることへの勇気を呼び覚ます。それぞれの仕方で、“(軸足をずらし) 揺れうごきつつかたちを変えていく”こと、そのなかでお互いの関係性を“切り結び続ける”ことへの勇気をである。

長きにわたって、このプロジェクトとかかわってきた鈴木将平(『“臨場・臨床の智”の工房』第5章の執筆者でもある)は、“対話的／対比的な問いかけ”により“かたちを変えつつうごいていく”こととかかわって、以下のようなリフレクションをのこした：

（立川プロジェクトは、）〈「整った社会」の中で「自分の」子どもを育てる〉とは、異なる関係性や社会を作ろうとしてきた。……[シンポジウムは、]「中大生」が所属する新原ゼミ“プロジェクト”全体を支えている動機、願望、そして実践として表された、（新原の）「学問」そのものの在り方を提示するものでもあった。そして、すでに地域にあった別の動機・願望・実践と結びついたものという意味での「大学と地域の協業」であった。

大学と地域に共通していたのは、……社会的な規範から何らかの意味（「偏差値」や「古い」など）で「逸脱」した人々がいられるような、ゆるやかなまとまりをもった「コミュニティ」「島」（新原）を作ることである。これは、新原と立川団地の人びとは異なる出自、プロセス、アプローチでありながら、似たような結論に至っていたということも意味している。……立川団地と立川プロジェクトの場合、「異質性を含み混む」という点で、他者を受容する回路が開かれていた。……（ともにやっていける相手であるかどうかを）「お互いに見ている」期間があり、次第に相補的な役割や、新しい意味を見出すきっかけが生まれたのであった。……「観察」が社会調査以上に、実践としての方法になっている。……そのような行為として現われる智（新原の言葉では「思行」と表現されている）の在り方を、**新原ではない者が、どのような言葉で説明し、意味づけていくのか**、ということが今後の「中大生」にとって課題となる。つまり、「誰もがいることを尊重される場」で、集団的に、自分にとって意味のある関心や対象について探究しつつも、それをまた別の（異質な）他者に対して伝達する、という課題である。……「中大生」が知りえない、さまざまな調整ややりとりが行われている。団地で起きていることを、どのように理解することができ、どのような言葉にすればよいのか。いずれにしても、こうした課題を、切り離して考えるのではなく、行為の中で考えるということが、「中大生」に課せられた課題であるといえる。

学問と地域それぞれの“願望と企図”の“切り結び”がもたらす可能性は、自らも“(軸足をずらし)揺れうごきつつかたちを変えていく／かたちを変えつつうごいていく”ことを条件としており、「モデル」を真似るだけでも、「理論」を「適応」するだけでもなく、自らの課題（「コース（cause, causa）」）をつかみ、他者に伝える方法を自ら学びとることが求められている。いわば、“思行（思い、志し、想いを馳せ、言葉にして、考えると同時に身体がうごいてしまっているという投企）”の冒険が求められていた。

当日、参加した学生たちの多くは、「切り捨てられない・安心して居られる場所」と「たたかいの場」である外の社会という対立図式ではなく、自らの身心にも深く刻み込まれた社会的時間との葛藤を生きる道を予感していた。他者との生身のコミュニケーションのなかで、関係性を“切り結び続ける”という“うごきの創起（movimenti emergenti）”を感じ取っていた。こ

れは「心地よさ」や「達成感」というよりも、「共創・共成プロジェクト」, すなわち, “ともに (共に/伴って/友として) 創ることを始め”, 葛藤のなか, そこでの「居心地悪さ (out of place)」³⁵⁾ をずっと生きていく人間に成る——その道をそれぞれが切り開かねばならないという命運への「doomed な (ただ幸せ, 安心とはいえない) 予感」であった。

シンポジウムの終了後, 目白駅近くでの懇親会に, 学生・卒業生とともに団地住民の方たちが参加してくれた。それは, 自分たちが慰労されるというよりも, 学生・卒業生への想い (団地での体験を, その後の生活のなかで生かし直して行ってほしいという “無償性/無条件性/惜しみなさ”) からの行為であった。自分たちへの “返礼 (おかえし)” など求めることなく, 一時間ほどで砂川の地へと帰っていった。

この “惜しみなさ” への期せずしての応答として, シンポジウムの場では, 阪口毅から, 「別の場所で, 同じような場を創っていくことになるだろう」という表出があり, また懇親会の場においても, 卒業生たちから, 自分もまた別の場所で同じような場を創っていくという言葉が, 対話のなかで発せられた。

6. 〈合わせ鏡〉の “コミュニティ共創・共成プロジェクト”

本節では, この〈調査研究/教育/大学と地域の協業〉の試みが何をめざし, 何を試みていたのかを確認したい。

35) 「居心地の悪さ」については, 以下のサイドとブローデルの言葉を想起している:

これほどながいあいだ孤独と不幸を味わったものの, 最終的にはわたしは自分のことを幸福と考えるようになった。今では, 「ふさわしく」あること, しかるべきところに収まっている (たとえば本拠地にあるというような) ことは重要ではなく, 望ましくないと思えるようになってきた。あるべきところから外れ, さ迷いつづけるのがよい。決して家など所有せず, どのような場所にあっても (特にわたしが骨を埋めようとしているニューヨークのような都市では) 決して過度にくつろぐようなことがないほうがいいのだ。……時に合わせ, 場所に合わせ, あらゆる類いの意外な組み合わせが変転していくというかたちを取りながら, 必ずしも前進するわけではなく, ときには相互に反発しながら, ポリフォニックに, しかし中心となる主旋律は不在のままに。これは自由の一つのかたちである, とわたしは考えたい。Edward W. Said, *Out of Place. A Memoir*; Alfred A. Knopf, New York, 1999 = 中野真紀子訳『遠い場所の記憶 自伝』みすず書房, 2001 年, 339-341 ページ。

個人としての人間は文明を裏切ることがある。それでもやはり文明は, いくつかの決まった, ほとんど変質しない地点にしがみついて, 自分自身の生活の仕方生きつづける。……人間には, あらゆる山登り, あらゆる移動が許されている。人間がただ一人で, 自分の名で旅をするとき, その人間と, その人間が運ぶ物質的ならびに精神的財産を止めることは何ものもできない。集団や社会全体となると, 移動は困難になる。一個の文明はその荷物全部を移動することはない。国境を越えるとき, 個人は慣れない環境で居心地が悪くなる。彼は背後に自分の属する文明を捨て, 「裏切る」。Fernand Braudel, *La Méditerranée et le monde méditerranéen à l'époque de Philippe II*, Librairie Armand Colin, Paris, 2 édition revue et corrigée, Deuxième Partie, 1966 = 浜名優美訳『地中海 III 集団の運命と全体の動き 2』藤原書店, 1993 年, 192 ページ。

6-1. 立川団地での“出会い”方の意味とその条件はいかなるものか？

なぜ立川・砂川地区、そして立川団地なのか。本調査研究チームが行ってきた“対話的／対位的なフィールドワーク”は、“基地”建設が地域問題の焦点となるようなフィールドを選択していた。ここでの“基地 (base, camp, installation)”とは、国家や地方自治体が計画・政策的に設置する巨大な施設（拠点）のメタファー（仮設概念）である。それゆえ、軍事施設のみならず、核施設、空港、清掃工場・最終処分場、下水処理場、火葬場、食肉処理施設、石油備蓄基地など、「迷惑施設 (NIMBY)」と称される施設が含まれる³⁶⁾。

ここでの「選択」は、実は「能動／受動」という分類から“ぶれてはみ出す”ものであり、メルッチはこれを「出会い」という言葉で表現している。「私たちに帰属するものではなく、むしろ出会いそれ自体のなかで与えられる」「出会い³⁷⁾」には、量子力学の世界における「量子もつれ」——離れた場であるのに絡み合い、編み合わされているような相関現象——のような相関関係を持つフィールドからの calling を待つというスタイルがあった。

「待つ」ことが可能となる条件としては、声をかけられたらすぐに請け負う準備があるという“協働／協力性 (disponibilità, willingness)”と“無償性／無条件性／惜しみなさ”が求められていた。この「陰徳」の部分を育む場所と時間を必要とした。これが、相関関係を予感するフィールドに入っていく（“存在と契りを結ぶ (s'engager)”）ときに、その〈合わせ鏡〉となるような「工房」を、くりかえし「普請」しようとしてきたことの“背景 (roots and routes)”で

36) “惑星社会のフィールドワーク (Exploring the Planetary Society, Esplorando la societa planetaria)”が、“基地の比較学”へと向かう経緯については、新原道信「“うごきの比較学”から見た国境地域—惑星社会の“臨場・臨床の智”への社会学的探求 (2)」『中央大学社会科学研究所年報』22号、2018年で論じている。

37) 以下のような理解である：

……出会いの苦しみと喜びは、微妙な均衡の中にある。他者性の挑戦に向き合えるかどうかは、自己を失うことなく他者の観点を引き受ける力にかかっている。感情移入 (empathy) は、日常言語の中にいまや入り込んでいる用語であり、それは他者の近くにあること、他者の観点から物事を見ることができるとことを示している。しかしこれは往路にすぎず、空虚や喪失から自分を守らねばならない。私たち自身のなかにしっかりと錨をおろしたまま、私たちの自己と他者の自己との間の空白に橋を架けるという力をもたないのであれば、そこに出会いはなく、単に博愛や善意があるにすぎない。出会いは、意味の二つの領域 (region) をいっしょにする。そしてそれは、私たちが調整している異なった振動数をもつ二つのエネルギーのフィールドを、互いに共鳴するところまでもっていく。出会いは、苦しみ、感情、病を・ともにすること (sym-pathy) である。すなわちそれは、自らの情動や力のすべてをふりしぼって、内からわきあがる熱意をもって、喜び、高揚し、痛み、苦しみに参加すること・ともにすること (com passion)、ある他者と・ともに・感じている (feeling with another) ということである。

ここで発見するのは、意味は私たちに帰属するものではなく、むしろ出会いそれ自体のなかで与えられるものであり、にもかかわらず、それと同時に、私たちだけがその出会いをつくり出すことができるということである。Melucci (1996=2008), 139-140 ページ。

ある³⁸⁾。

しかし、この“声をかけられたら、なんとかありあわせの道具で calling に応える”という初発の“うごき”から、“うごきの場に居合わせ”，“お互いがそこになくなった後の場のうごきに想いを馳せる (caring)”と成るには、別の条件が必要となる。非対称性を持った他者同士の“出会い”のなかに、共通するものがかりうじて存在することをお互いに“感知する (perceiving/sensing/becoming aware, percependo/intuendo/ diventando consapevole)”，そして“感応する (responding/sympathizing/resonating, rispondendo / simpatizzando / risonando)”が必要である³⁹⁾。そこでは、ともにいない「関係 (Beziehung)」となってしまうと相手のかたわらにあるという「間柄 (Verhältnis)」を持ちつつうごいていく関係性 (Relativität) の構築が、隠されたプロジェクト (投企) となっていた。

ともにいなくなってしまう大半の時間のなかでともに在るために、いずれは別の道を別の場所で歩む相手に何を遺せるかを考えつつ、時間と場所をともにするという在り方である。学問的实践や地域での日常実践の“かまえ”，エピステモロジー，理論，技法・作法，工夫のすべてを，他のひとたちに開示し提供する（そのために，同時におなじことをする機会をくりかえしつくり，実際にやってみせ，同じメッセージを違う言い方で何度も噛んで含めるように伝える，あるいは背中を見せるかたちで伝える）ことに骨惜しみをしないという“在り方”である。

こうして、「よい子がすんでいるよい町」に「適応」しつつも，身心の悲鳴を“感知”している学生が，非対称性を持ったフィールドの内なる悲鳴に“感応”するため，実は，そこから出て行き，“たったひとりで異郷／異教／異境の地に降り立つ”ための〈合わせ鏡〉の関係性をもったふたつの「コミュニティ」形成とかわることとなった。

6-2. 〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉のための大学側の「コミュニティ」は

何をやって来たのか？

では、〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉のための大学側の「コミュニティ」——“臨場・臨床の智”の工房 (Bottega per “cumscientia ex klinikós”, Laboratory for “Living Knowledge”) を制度的に成り立たせていたゼミでの諸活動としては、何をやって来たのか：

38) 新原 (2019) の新原道信編『“臨場・臨床の智”の工房—国境島嶼と都市公営団地のコミュニティ研究』(中央大学出版部, 2019年)の序章「何をめざし, 何を試みたのか—惑星社会と“臨場・臨床の智”」(23-24ページ)でフィールドの選択についてすでに同じ内容を述べた後, それ以後の節でさらに詳述している。

39) ここでは, 「異なる種類に分類されたものどうしのあいだに, 相互作用があることに注目し, その相互作用をとおして, それぞれ固有と思われた属性が変化することがあることを念頭においている」(鶴見和子『南方熊楠—地球志向の比較学』講談社, 1981年, 182ページ)という鶴見和子の比較学を念頭においている。

- ①もっとも困難で余裕がないときにも、他者への配慮（caring）を持ちつづけ、その場に集うひとが、あたりまえのように自分能力の限界の少し上に水準を置いて“ことに臨む”。自分の境界をこえて地域に入ることが出来る人間となるために、複数のテーマとリサーチ・クエスチョンが埋め込まれた複合的な調査研究のトレーニングをする。まず手足をうごかし、そのうごきのなかで、自前のデータを蓄積し自前の理論と方法を練り上げることにチャレンジする。
- ②何かを「切り捨て」「絞り込む」ことをしなくても、複数のことを有機的につなげてやることで、個々の場面で常に一定の水準の安定したパフォーマンスを確保できる“在り方 ways of being”を身につける。“フィールドワークの力（自分で道を切り開き、大切なこと／ひとに出会い、ともに場を創る力）”を蓄え、「一人親方」となるための修行期間を経て、いずれは自分の「店」を開いて、仲間とともに「店」をやりくりし、次の世代を育てていける「社会のオペレーター（生活の場に居合わせ、声を聴き、要求の真意をつかみ、様々な「領域」を行き来し、〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想していくひと）」と成る。
- ③“対話的／対位的”な関与型フィールドワーク（“惑星社会／内なる惑星のフィールドワーク”と“コミュニティでのフィールドワーク／デイリーワーク”）は、フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど、何よりもひとや土地との“出会い”方を学ぶ機会となる。ゼミやプロジェクトの運営と世代継承を通じて、〈形骸化から内面崩壊〉という線形的な隘路から抜け出し、垂直的な組織運営による調査研究とはことなる関係性構築を試みる。
- ④そのなかで、学生たち（「社会の子どもたち」）は、「素早く切り捨てる／ゆっくり、しっかり生きる」という葛藤を抱きつつ、そこでの「居心地悪さ」を生きていくための“臨場・臨床の智（cumscientia ex klinikós, living knowledge）”を育む道を自ら学ぶ。
- ⑤「調査研究」それ自体以上に、それを含み混み、下支えする「関係性の動態」の側にこそ「療法的な意味」がある。自分の内なる社会的病をとらえることで、“自らの社会的病とともにある社会の医者”である“リフレクシヴで療法的なプレイング・セルフ（Reflexive & Therapeutic Playing Self）”となっていく。

このように「ゼミ」や「プロジェクト」という相対的に守られた場所で、「自分を開く」練習をしていくことになっていた。

6-3. 〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉の課題

〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉としては、いかなる課題を設定していたのか、現代

社会認識としては、極度にシステム化し端末化した社会における“多重／多層／多面”のモノ化、脳化（没身体化）した人間の“社会的痛苦（*patientiae, sufferentiae, doloris ex societate*）”への着目がある⁴⁰⁾。そこでは、砂粒のような「個」として抑圧移譲の端末となる可能性を縮減することの意味と、それを創り続けることのむくわれなさのアンビヴァレンス（*ambivalence*）を識りつつも、以下のような課題が意識されていた：

- ① 調査研究者が持ってきた「コミュニティ・デザイン」の「モデル適応」ではない。大学と地域の間で、“無償性／無条件性／惜しみなさ”の“交感／交換／交歓（*scambio, Verkehr*）”が生まれ、「人間の里山・里海」を守り育ててきた。“不協の悲鳴（*le grida disfoniche*）”，同時多発的に継続的に、表面上の「調和」「安定」を揺りうごかす叫び声を“すくい（掬い／救い）”とる（*scoop up/out, scavare, salvare, comprendere*）”。ひとや他の生物や自然がただ在ることを相互承認し、人間・他の生物・生態系がそこで育まれる地域を育てる，“生存の場としてコミュニティの探求（*Exploring Communities for Sustainable Ways of Being*）”である。すなわち、「異質性を含み混む（異質な多声が雑唱する）コミュニティ」研究である。
- ② 「社会のオペレーター（生活の場に居合わせ、声を聴き、要求の真意をつかみ、様々な「領域」を行き来し、〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想していくひと）」の芽を持っているひと、コミュニティを“ともに（共に／伴って／友として）創ることを始める”ことに共感・共鳴し、他者に働きかけていくひとを、大学のなかに、地域のなかに探すこと。地域社会に「居場所がない」「生きづらさ」を抱えるひとに対して、「ただ在ることの意味」と「システムへの適応だけでは生きていくことにはならない」ということを“対話的／対位的に問いかけ続ける（*keep asking questions dialogically and contrapuntally*）”ことである。

40) メルッチは、「自然の脱自然化（*denaturalization*）」と「コンフリクトの文化・化（*culturalization*）」、「個人化」し「脳化」することで、システムの「端末」として「適応」していくことがもたらすアンビヴァレンス（*ambivalence*）に着目していた（「個人化」し、「脳化」する社会については、新原（2016b）でも論じている）：

私たちは、身体を操作する力量が増大していくような社会を想像することが可能である。というのも、遺伝子の構造や情動をつかさどる化学物質のなかへと深く入り込んでいくという事態は、もはや単にSFの話ではなく、予見可能な未来の現実的可能性だからである。……複雑／複合システムにおいて私たちは、人間の器官が過剰に知能化されていく事態に、そして人間の能力が機械へと移転されていくという事態にさえ直面している。このことは人類の大脳皮質の力をさらに拡張していくことに寄与していくであろう。こうして集合的頭脳なるものが、過剰に脳化を推し進めていき、それが今や私たちの科学技術のなかに深く埋め込まれていくことで、それとは別の人間の能力である感情、情動、動き、生物としてのリズムに関わるものすべてが蝕まれていく。Melucci（1996=2008）、209 ページ）。

- ③ “ともに（共に／伴って／友として）創ることを始めた” ひとが，“たったひとりで異郷／異教／異境の地に降り立ち”，別の場所で別のかたちで始めることが自然に起こっていくことを祈念し，目立たず，隠れたかたちで下支えすること。
- ④ つながりとは，切り結ぶ／ぶつかりあう／出会う／いきあう／異なる組成をもったものとして互いを受け入れる（そのことが自分の身心に負担をもたらすことも甘受しつつ）こと。この「創造的苦痛」⁴¹⁾をともなう試みが，“多重／多層／多面”の「一所懸命」として，多発的に起こっていくなかで，タテ・ヨコ・ナナメのやわらかいつながりを創っていくことを使命とすることである。

7. むすびにかえて——“コミュニティでのフィールドワーク／デイリーワーク”の存在意義

本稿のむすびとして，“惑星社会の諸問題を引き受け／応答する”ためへの“願望と企図の力 (ideabilità e progettualità)”である〈“コミュニティでのフィールドワーク／デイリーワーク”には，いかなる意味と課題があるのか〉という問いへの応答を試みたい。

- ① 調査研究者と当事者が，長期にわたって日常的な実践を共有するかたちで協業を積み重ねるなかで，いかなる関係性を構築するのか，その関係性の動態にいかなる意味があるのか？

湘南と立川で，地域と大学の間で，“対話的／対位的に問いかけ続け (keep asking questions dialogically and contrapuntally)”，“切り結び続ける”という“コミュニティでのフィールドワーク／デイリーワーク”の“舞台裏”を「開示」し，体現・再現することを試みた。

その条件として“無償性／無条件性／惜しみなさ”の“交感／交換／交歓”があり，“関係性が切り結び直される瞬間”があり，〈そこにいなくなった後の“場のうごき”に想いを馳せる (caring)〉という“想像／創造力 (immaginativa/creatività)”があった。

- ② 立川団地との間でそれが一時的に生じたとして，そこにはいかなる意味があるのか？

惑星規模の社会のリアリティにふれるための“惑星社会／内なる惑星のフィールドワーク (Exploring the Planetary Society/Inner Planet)”が，地に足をつけた創造的プロセスとなるには，“拘束と絆 (servitudo humana, human bondage)”が必要となる。それは，“ごくふつうの受難者／受難民 (homines patientes della strada)”の“臨場・臨床の智 (cumscientia ex klinikós, living

41) 下記の市井三郎の言葉に拠るものである：

人間歴史の未来を創るのは，いうまでもなく人間である。多くの人間は過去，現在の惰性に押し流されずとも……。不条理な苦痛を軽減するためには，みずから創造的苦痛をえらびとり，その苦痛をわが身にひき受ける人間の存在が不可欠なのである。市井三郎『歴史の進歩とはなにか』岩波書店，1971年，201，148ページ。

knowledge)”を“すくい（掬い／救い）とり、くみとる（scoop up/out, scavare, salvare, comprendere)”ための調査研究者の“臨場・臨床的な在り方（ways of being involved in the crude reality)”の、生きた「一時的な」プロセスの「もつれ」によってこそ可能となると考える。

メルッチから遺す言葉として託された「リフレクシヴな調査研究にむけて」は、以下のように結ばれている：

調査のプロセスにおいては、大きく揺れ動きつつも、客観的な立場に立つということも、リフレクシヴであり続けるということも、避けて通ることは出来ず、自らが生産する知や認識のあり方（流儀）の特徴に対して持続的な注意を払うというかまをを保ちつつ、このエピステモロジーのジレンマのなかで生きていくしかない⁴²⁾。

2019年3月にセウタとメリリャへのフィールドワークをともにする予定のメルレルからは、下記のような言葉が届いた：

大学教員は、家族と分かち合うべき祝祭日があることを識っている。しかしまた、自分の仕事が、いついかなる瞬間においても在り続けていることを識っている。焦眉の、偶発の事態に突きうごかされるかたちで、24時間、365日、常にその仕事は潜在している。それは、合理的な選択や判断によるものとして常に在るわけでないものだ。（2019年2月24日の新原宛の私信より）

私たちもまた、この二人の智者と同じく、“声をかけられたら、なんとかありあわせの道具で現実の課題に応答するという生き方・哲学（filosofia di disponibilità）”とともに、“生身の社会（living society: city, community and region）”に対して「開かれた理論（teorie disponibili）」を創ろうとし続けるしかない⁴³⁾。

しかもこの“願望と企図”は、「上空」から放射された「理論」ではなく、『“臨場・臨床の智”の工房』の第Ⅲ部の表題となったような“乱反射する生身のリフレクション”のなかで呻きつつ求めるしかないものである。

③ “コミュニティでのフィールドワーク／デイリーワーク”には、いかなる課題があるのか？

42) Melucci (2000=2014), 103 ページ。

43) “声をかけられたら、なんとかありあわせの道具で現実の課題に応答するという生き方・哲学（filosofia di disponibilità）”はメルレルとの間で、“開かれた理論（teorie disponibili）”はメルッチとの間で、それぞれとの生身の対話のなかで発せられた言葉である。

“臨場・臨床の智”の工房への参加者（「社会のオペレーター（生活の場に居合わせ、声を聴き、要求の真意をつかみ、様々な「領域」を行き来し、〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想していくひと）」）の課題は以下のようなものであり続ける。これは、最晩年のメルッチが、いわば「遺言」として遺してくれた「リフレクシヴな調査研究にむけて」で提示した調査研究者と当事者の使命（第1節を参照されたい）を発展させたものである：

- ①〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉に取り組む調査研究者の使命は、その能力を、あくまで新たな社会の構想につながる認識の地平を生産することのみに活用することである。
- ②この営みに参加する者は、有意の情報や知見を他の調査者にもたらず必要がある。
- ③調査者は調査によって獲得した新たな認識をなんらかのかたちで他の調査者や自分が属するコミュニティ／かかわるフィールドに返す必要がある。そして調査に応じた当事者もまた他の当事者に新たな認識を返す必要がある。そこで重要となるのは、結果の伝達を通じての直接的なコミュニケーションそのものである。
- ④社会と自らの行為のリフレクションをしていくという意味での調査者でもある当事者と調査者は、“対話的にふりかえり交わる（*riflessione e riflessività*）”なかで、その関係性を“切り結び続ける（*ricostellando la relazione, reconstellating the relationship*）”。当事者も調査者も、それぞれの目的に応じたかたちで調査の結果をわがものとする。

この課題に向けての「生きた（創造的）プロセス」は、シンポジウム後すぐに、立川団地との間での新規プロジェクトの打ち合わせが開かれ、院生・学生・卒業生有志による「子どもプロジェクト」が発足し、加藤彰彦の横浜アカデミア（新原が横浜市立大学時代に、その前身である横浜社会臨床研究会と痛み研究会にかかわっていた）とふたたびつながるといったかたちで、さらにうごきつつある。

付記：本稿は、社会科学研究所の研究チーム「惑星社会と臨場・臨床の智」および第27回「中央大学学術シンポジウム」の「臨場・臨床の智」チームの調査研究活動に加えて、前川財団家庭教育研究助成金「社会の子どもたち」が巣立つ共創・共成コミュニティに関するイタリアとの共同研究（2018年度）、中央大学特定課題研究費「社会文化的な鳥々」から見た〈基地〉の“比較学”（2018年度）、科学研究費・基盤研究B海外学術調査「惑星社会」の問題に応答する“未発の社会運動”に関するイタリアとの比較調査研究（2018年度）によって実施した調査研究活動の成果が含まれている。とりわけ、本稿は、「未来教育シンポジウム」に参加された聴衆の方々、立川団地の方々、学生・卒業生の「声とまなざし」からの授かり物である。あらためて、シンポジウムの参加者として、この機会を与えてくださった前川財団に感謝の意を表したい。

